

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2023年6月16日

【事業年度】 第88期(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)

【会社名】 石塚硝子株式会社

【英訳名】 ISHIZUKA GLASS CO.,LTD.

【代表者の役職氏名】 代表取締役 社長執行役員 石塚 久継

【本店の所在の場所】 愛知県岩倉市川井町1880番地

【電話番号】 0587-37-2111(代表)

【事務連絡者氏名】 取締役 常務執行役員 財務部長 畔柳 博史

【最寄りの連絡場所】 愛知県岩倉市川井町1880番地

【電話番号】 0587-37-2111(代表)

【事務連絡者氏名】 取締役 常務執行役員 財務部長 畔柳 博史

【縦覧に供する場所】 石塚硝子株式会社 東京支店
(東京都江東区東陽二丁目2番20号 東陽駅前ビル7階)
石塚硝子株式会社 大阪支店
(大阪市大正区泉尾五丁目13番11号)
株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)
株式会社名古屋証券取引所
(名古屋市中区栄三丁目8番20号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第84期	第85期	第86期	第87期	第88期
決算年月	2019年 3月	2020年 3月	2021年 3月	2022年 3月	2023年 3月
売上高 (百万円)	71,186	73,745	64,940	69,384	56,749
経常利益 (百万円)	2,144	2,165	1,153	2,791	2,317
親会社株主に帰属する 当期純利益又は親会社 株主に帰属する当期純 損失() (百万円)	1,488	1,180	3,023	2,254	252
包括利益 (百万円)	1,537	648	2,000	2,232	104
純資産額 (百万円)	27,597	27,939	26,659	28,863	28,749
総資産額 (百万円)	81,199	82,815	80,564	82,097	86,536
1株当たり純資産額 (円)	5,888.48	5,946.55	5,510.68	6,031.64	5,997.88
1株当たり当期純利益 又は1株当たり当期純 損失() (円)	419.83	281.89	722.17	538.49	60.26
潜在株式調整後1株 当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	30.4	30.1	28.6	30.8	29.0
自己資本利益率 (%)	6.33	4.76	12.61	9.33	1.00
株価収益率 (倍)	4.22	6.18	-	3.75	24.33
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	6,162	5,756	4,211	4,093	2,087
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	2,674	5,419	4,376	548	5,593
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	6,676	1,238	1,107	1,868	4,140
現金及び現金同等物 の期末残高 (百万円)	3,534	2,624	3,598	5,325	6,069
従業員数 〔ほか、平均臨時雇用 人員〕 (名)	2,151 [547]	2,153 [559]	2,075 [534]	2,018 [482]	1,867 [506]

- (注) 1. 第84期、第85期、第87期及び第88期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。第86期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、1株当たり当期純損失であり、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2. 第84期においては、決算期の変更を行った一部の連結子会社について、10か月間の損益を連結しております。
3. 第88期の期首より、「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を適用しており、第88期の主要な経営指標等については、当会計基準等を適用した後の数値を記載しております。
4. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を第85期の期首から適用しており、第84期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第84期	第85期	第86期	第87期	第88期
決算年月	2019年 3月	2020年 3月	2021年 3月	2022年 3月	2023年 3月
売上高 (百万円)	59,628	61,856	54,672	54,593	36,739
経常利益 (百万円)	1,337	798	41	2,101	1,539
当期純利益又は当期純損失 () (百万円)	653	586	3,472	1,661	159
資本金 (百万円)	6,344	6,344	6,344	6,344	6,344
発行済株式総数 (千株)	4,219	4,219	4,219	4,219	4,219
純資産額 (百万円)	21,998	21,401	18,654	20,009	19,952
総資産額 (百万円)	66,641	67,111	68,272	68,214	75,575
1株当たり純資産額 (円)	5,254.58	5,112.59	4,456.40	4,780.28	4,766.93
1株当たり配当額 (うち1株当たり中間配当額) (円)	65.00 (-)	48.00 (-)	- (-)	45.00 (-)	35.00 (-)
1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失 () (円)	184.28	140.08	829.57	396.99	38.06
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	33.0	31.9	27.3	29.3	26.4
自己資本利益率 (%)	3.07	2.70	17.34	8.60	0.80
株価収益率 (倍)	9.62	12.43	-	5.09	38.52
配当性向 (%)	35.3	34.3	-	11.3	91.9
従業員数 [ほか、平均臨時雇用人員] (名)	784 [99]	787 [98]	616 [58]	596 [43]	457 [33]
株主総利回り (比較指標：TOPIX配当込み) (%)	71.1 (96.2)	72.4 (78.4)	83.5 (125.9)	85.1 (122.0)	64.9 (126.6)
最高株価 (円)	2,615	2,717	2,240	2,515	2,090
最低株価 (円)	1,705	1,585	1,726	1,851	1,567

- (注) 1. 第84期の1株当たり配当額65円には、創業200年記念配当20円を含んでおります。
2. 第84期、第85期、第87期及び第88期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。第86期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、1株当たり当期純損失であり、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
3. 第88期の期首より、「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を適用しており、第88期の主要な経営指標等については、当会計基準等を適用した後の数値を記載しております。
4. 最高株価及び最低株価は、2022年4月3日以前は東京証券取引所第一部におけるものであり、2022年4月4日以降は東京証券取引所スタンダード市場におけるものであります。
5. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を第85期の期首から適用しており、第84期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

2 【沿革】

1819年11月(文政2年)、石塚岩三郎(初代)が長崎でオランダ人からガラス製造技術を習得し、岐阜県可児郡土田村でガラスを製造したことが、連結財務諸表提出会社の始まりであります。

現在では、ガラスびん、ガラス食器、セラミックス製品、プラスチック及び紙容器と分野を拡大し、容器の総合メーカーグループへと飛躍をはかっております。

年月	概要
1888年11月	2代石塚文左衛門、名古屋に移住操業
1927年1月	3代石塚岩三郎、名古屋市昭和区に工場を新設稼働
1927年7月	4代石塚正信、我が国最初のシーメンス式炉による白素地硝子生産に成功
1941年4月	企業整備により有限会社石塚硝子製造所設立
1946年12月	石塚硝子株式会社に改組
1956年9月	計量法制定に基づく特殊容器製造事業場の指定を通産省より受け、引き続き期間更新し今日に至る
1961年7月	名古屋証券取引所に上場
1961年10月	岩倉食器工場を新設稼働
1962年10月	東京証券取引所に上場
1963年1月	岩倉びん工場を新設稼働
1969年9月	千代田硝子株式会社へ資本参加
1970年4月	ガラス製コップJIS表示許可工場(岩倉工場)の認可
1971年11月	ガラスセラミックス(デビトロン・デビトロンメタリック)の開発に成功し、国内外の特許を取得
1972年6月	ウイストーン株式会社を設立し、プラスチック事業に進出
1973年3月	デビトロン・デビトロンメタリック工場を新設稼働
1974年11月	消費生活用製品安全法に基づく「炭酸飲料を充填するためのガラスびん製造事業」の登録
1976年9月	INTERNATIONAL PAPER CO.(米国)と合併会社アイピーアイ株式会社を設立し、紙容器事業に進出
1978年12月	石塚硝子物流株式会社を設立し、ガラス製品の保管・出荷作業を委託
1982年1月	クリスタル食器に進出
1983年8月	千代田硝子株式会社が東京アデリア株式会社に商号変更
1984年4月	東京工場を新設稼働
1984年9月	セラミックス工場を新設稼働
1985年5月	石塚硝子物流株式会社が石塚物流サービス株式会社に商号変更
1990年4月	技能研修センターを開所
1990年5月	久金属工業株式会社へ資本参加
1990年9月	東京アデリア株式会社がアデリア株式会社に商号変更
1996年4月	東京工場にPETボトル工場を新設稼働
1996年10月	石硝運輸株式会社を設立し、貨物運送を委託
1997年1月	日本パリソン株式会社を設立し、PETボトルブリフォーム事業に進出
1998年10月	岩倉工場ISO9001の認証取得
1999年3月	東京工場ISO9001の認証取得
1999年10月	岩倉工場ISO14001の認証取得
2000年10月	東京工場ISO14001の認証取得
2001年5月	岩倉工場にPETボトル工場を新設稼働
2002年5月	株式会社アサヒビールパックスと包括的業務提携
2003年4月	株式会社アサヒビールパックスの発行済株式総数を取得
2003年6月	株式会社アサヒビールパックスを吸収合併
2003年9月	本社機構を愛知県岩倉市川井町1880番地に移転
2005年4月	石塚玻璃(香港)有限公司を中国に設立
2006年8月	アイピーアイ株式会社の株式を全数取得し、100%子会社化
2009年4月	亞德利玻璃(珠海)有限公司を中国に設立
2010年6月	アイピーアイ株式会社を吸収合併
2012年5月	遠東新世紀グループと遠東石塚グリーンペット株式会社を設立し、PETボトルリサイクル事業に進出
2012年8月	岩倉工場FSSC22000の認証取得
2013年8月	ISHIZUKA GLASS (UK) LTD.を英国に設立
2014年10月	亞德利玻璃(珠海)有限公司及び石塚玻璃(香港)有限公司の解散を決議
2015年2月	鳴海製陶株式会社の株式を全数取得し、100%子会社化
2017年3月	PT. NARUMI GLOBAL SUPPLY INDONESIAをインドネシアに設立
2019年3月	ISHIZUKA GLASS (EUROPE) GmbHをドイツに設立
2019年12月	創業200年を迎える

年月	概要
2020年9月	紙容器関連事業を分社化し、王子ホールディングス株式会社と石塚王子ペーパーパッケージング株式会社を設立
2022年4月	東京証券取引所及び名古屋証券取引所の市場区分の見直しにより、東京証券取引所は市場第一部からスタンダード市場へ、名古屋証券取引所は市場第一部からプレミアム市場へ移行

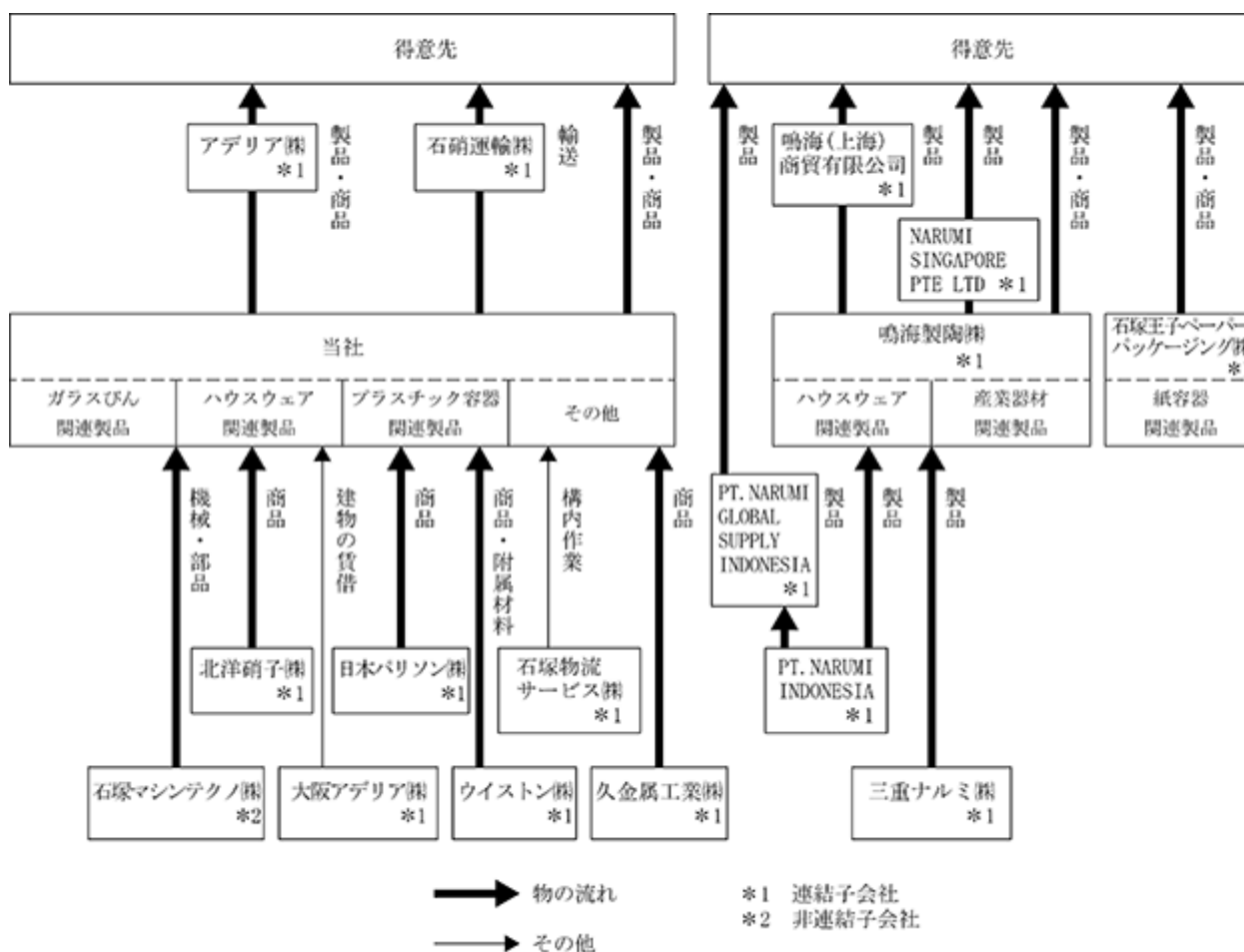
(注) 2023年6月に日本機械金型株式会社の株式の全数を取得し、100%子会社化しております。

3 【事業の内容】

当社グループは、当社及び子会社の計21社で構成され、ガラスびん関連製品、ハウスウェア関連製品、紙容器関連製品、プラスチック容器関連製品、産業器材関連製品、その他の製品の製造販売事業及びそれに付帯する事業を行っております。

当社グループの主な事業内容は、次のとおりであります。

- ガラスびん関連 ガラス製容器等を製造・販売しております。
- ハウスウェア関連 ガラス製及び陶磁器製食器等を製造・販売しております。
- 紙容器関連 紙容器及び紙容器に係る充填機械を販売・メンテナンスしております。
- プラスチック容器関連 PETボトル用プリフォーム等を製造・販売しております。
- 産業器材関連 加熱調理器具のトッププレート等を製造・販売しております。
- その他 セラミックス製品及び金属キャップ製品の製造・販売を行っております。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は 出資金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社)					
アデリア株式会社	東京都江東区	100	ハウスウェア 関連	100.0 (-)	当社のガラス食器類を販売 当社が事務所を賃貸 資金の借入 役員の兼任2名
石塚物流サービス株式会社	愛知県岩倉市	10	その他	100.0 (-)	当社が構内役務を委託 役員の兼任1名
ウイストン株式会社	愛知県海部郡蟹江町	200	プラスチック 容器関連	100.0 (50.0)	当社がプラスチック製品を購入 資金の貸付 役員の兼任1名
石硝運輸株式会社	愛知県岩倉市	20	その他	100.0 (-)	当社が運送役務を委託 役員の兼任2名
日本パリソン株式会社	愛知県岩倉市	1,530	プラスチック 容器関連	90.0 (0.25)	当社がプラスチック製品を購入 当社が土地及び建物等を賃貸 役員の兼任2名 資金の貸付
久金属工業株式会社	大阪市西成区	60	その他	55.9 (1.0)	当社が金属キャップ製品を購入 役員の兼任2名
北洋硝子株式会社	青森県青森市	50	ハウスウェア 関連	100.0 (-)	当社がガラス食器類を購入 役員の兼任2名
鳴海製陶株式会社	名古屋市長区	540	ハウスウェア 及び産業器材 関連	100.0 (-)	役員の兼任3名
三重ナルミ株式会社	三重県志摩市	100	ハウスウェア 関連	100.0 (100.0)	-
PT. NARUMI INDONESIA	インドネシア	6,000千米ドル	ハウスウェア 関連	100.0 (100.0)	-
NARUMI SINGAPORE PTE LTD.	シンガポール	246千米ドル	ハウスウェア 関連	100.0 (100.0)	-
鳴海(上海)商貿有限公司	上海市(中国)	7,603千元	ハウスウェア 関連	100.0 (100.0)	-
PT. NARUMI GLOBAL SUPPLY INDONESIA	インドネシア	2,500,000千 IDR	ハウスウェア 関連	100.0 (100.0)	-
大阪アデリア株式会社	大阪市大正区	100	その他	100.0 (-)	当社が事務所を賃借 役員の兼任2名
石塚王子ペーパーパッケージ ング株式会社	兵庫県神崎郡福崎町	100	紙容器関連	60.0 (-)	当社が土地及び建物等を賃貸 役員の兼任1名 資金の貸付

- (注) 1. 主要な事業の内容欄にはセグメントの名称を記載しております。
2. 日本パリソン株式会社、鳴海製陶株式会社及びPT. NARUMI INDONESIAは特定子会社に該当しております。
3. 議決権の所有割合の()は間接所有であり内数であります。
4. 有価証券届出書又は有価証券報告書を提出している会社はありません。
5. 鳴海製陶(株)及び石塚王子ペーパーパッケージング(株)については、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益状況

	鳴海製陶(株)	石塚王子ペーパーパ ッケージング(株)
(1) 売上高	6,677百万円	7,147百万円
(2) 経常利益又は経常損 失()	828	194
(3) 当期純利益又は当期 純損失()	560	65
(4) 純資産額	6,157	1,585
(5) 総資産額	8,550	4,842

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2023年3月20日現在

セグメントの名称	従業員数(名)	
ガラスびん関連	163	[20]
ハウスウェア関連	767	[94]
紙容器関連	184	[26]
プラスチック容器関連	271	[154]
産業器材関連	62	[25]
報告セグメント計	1,447	[319]
その他	336	[171]
全社(共通)	84	[16]
合計	1,867	[506]

- (注) 1. 従業員数は、就業人員であります。
2. 従業員数欄の [外書] は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。
3. 全社(共通)として記載されている従業員数は、経営企画部、業務監査部、管理部門及び一部の連結子会社の管理部門に属するものであります。ただし、セグメント情報においては、当該部署で発生する費用をその費用の発生により便益を受ける程度に応じ各セグメントに配賦しております。

(2) 提出会社の状況

2023年3月20日現在

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
457 [33]	43.2	18.4	5,421

セグメントの名称	従業員数(名)	
ガラスびん関連	163	[20]
ハウスウェア関連	122	[3]
プラスチック容器関連	15	[-]
報告セグメント計	300	[23]
その他	92	[1]
全社(共通)	65	[9]
合計	457	[33]

- (注) 1. 従業員数は就業人員であります。
2. 平均年間給与は税込額であり、基準外賃金及び賞与を含んでおります。
3. 従業員数欄の [外書] は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。
4. 全社(共通)として記載されている従業員数は、経営企画部、業務監査部及び管理部門に属するものであります。
5. ガラスびん関連事業の従業員数が減少しておりますが、その主な理由はガラスびん生産体制の再編により姫路工場でのガラスびんの生産停止に伴う離職によるものです。

(3) 労働組合の状況

連結財務諸表提出会社の石塚硝子中央労働組合(ユニオンショップ制)は1964年6月に結成され、2023年3月20日現在、加入者は612名で、1995年12月12日に結成されたセラミックス産業労働組合連合会に加盟しております。

連結子会社のうち、久金属工業(株)、鳴海製陶(株)、三重ナルミ(株)及び北洋硝子(株)は労働組合があり、概要は以下のとおりです。

久金属工業(株)の久金属労働組合(ユニオンショップ制ではない)は1958年10月8日に結成され、2022年12月31日現在、加入者は23名で、JAM大阪に加盟しております。

鳴海製陶労働組合(ユニオンショップ制)は1946年4月1日に結成され、2022年12月31日現在、加入者は146名で、セラミックス産業労働組合連合会に加盟しております。

三重ナルミ(株)の三重ナルミ労働組合(ユニオンショップ制)は1993年6月9日に結成され、2022年12月31日現在、加入者は43名で、セラミックス産業労働組合連合会に加盟しております。

北洋硝子(株)の北洋硝子労働組合(ユニオンショップ制ではない)は1999年に結成され、2022年12月31日現在、加入者は50名で、UAゼンセンに加盟しております。

その他の連結子会社に労働組合はありません。

現在、いずれも労使間の事項は健全に処理されており、特記すべきものはありません。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末において当社グループが判断したものであります。

(1) 経営の基本方針

当社は2019年12月1日に創業200年を迎えるにあたり、新たな企業理念を制定しました。新たな企業理念では、次の100年に向けて、企業として更なる発展を続け当社グループのめざすべき姿を明確にしています。

<わたしたちの使命>

くらしに彩り、豊かさと安心をお届けします。

私たち石塚硝子はメーカーです。モノづくりを通じて社会に貢献することが私たちの存在意義です。ただし、私たちは単にモノを作っている訳ではありません。一つひとつの製品で、より良く、より便利に、より価値のある暮らしをつくり出したいという想いを込めてお客様に製品をお届けしています。当社で働くすべての社員がその想いを共有し、社会とその暮らしになくてはならない企業になりたいと考えています。

<わたしたちのビジョン>

価値あるモノづくりとともに、社会で輝くヒトを育て、未来へ向かうユメを築きます。

ユメには2つの意味を込めています。一つは、価値あるモノづくりを続け、企業として成長すること、もう一つは、一人ひとりが人生に生き甲斐をもち、それぞれの願いを叶えていくことです。また価値あるモノづくりには、人財育成を通じたヒトづくりが欠かせません。これらが重なりあうことでいつの時代にも求められる企業であり続けることができると考えています。

<わたしたちの約束>

「誠実」「挑戦」「成長」

「誠実」は、200年の歴史で培った当社のDNAであり、すべてのステークホルダーに向き合う基本姿勢です。「挑戦」は、常に改善や新たな物事への挑戦を積極的に行うこと、また挑戦による失敗を恐れない風土を大切にしたいという意思を示しています。「成長」は、企業の成長という意味だけではなく、一人ひとりが豊かな人生を過ごすために、公私ともに成長して欲しいという想いを込めました。この3つの約束を合言葉に、私たちは未来に向かって進んでいきます。

(2) 中長期的な経営戦略及び目標とする経営指標

ISHIZUKA GROUP 2030 ~挑戦し続けることにより、躍動する企業へ~ 2024年度中期経営計画「変化するスピードに負けない」

現在も影響を及ぼしている新型コロナウイルス感染症をキッカケとして、顕在化していなかった課題が前倒して表面化し、ニューノーマルの定着により消費者の行動や意識が変容するなど外部環境が大きく変化しました。このような状況下において、長期的な視点で会社の方向を示すべきと考え、2019年に制定した企業理念を踏まえ、ISHIZUKA GROUP 2030及び2024年度中期経営計画を策定しました。

ISHIZUKA GROUP 2030

コンセプト : ~挑戦し続けることにより、躍動する企業へ~

重点ポイント: 2030年度連結営業利益50億円
ISHIZUKA GROUPを支える「ヒトづくり」
環境と調和した持続可能な未来社会への貢献



2024年度中期経営計画

コンセプト : 「変化するスピードに負けない」

重点ポイント: 2024年度連結営業利益35億円
中堅・若手人財の育成への取り組み
2030年CO2排出量50%削減(2015年対比)に向けたロードマップ作りと実践

『2024年度中期経営計画の主な取り組み』

2030年度の連結営業利益50億円に挑戦するため、以下の取り組みを進めて2024年度に連結営業利益35億円の達成をめざす

- ・既存事業を強化しつつ、周辺の関連事業について取り込みを図り、採算を重視した積極的な取り組みを進める
 - ・新規事業はM & A投資も含め、将来の柱となる事業を創り出していく
- 中堅社員の育成を早期に着手し、将来の中核となる人財の育成を精力的に行う
社会共通の目標であるCO2排出量削減に取り組むため、まずはグループ全体の方針作りに着手し、2030年度の目標達成に向けたロードマップ作りとその実践に取り組む

(3) 経営環境、中期的な経営戦略、優先的に対処すべき事業上の課題

< ガラスびん関連事業 >

ガラスびん市場は、他素材容器の置換などによる市場の縮小に加え、飲食店の時短営業などにより市況が急激に悪化しました。また、ウクライナ情勢をめぐる地政学的問題などにより、LNG価格の高騰や原材料の調達が難しくなるなど外部環境が大きく変わりました。

このような状況下において、生産拠点である姫路工場の操業を2022年に停止しました。岩倉1工場体制における最適なオペレーションの構築と実施をするとともに、品質面などの付加価値を高め、原燃料価格の高騰に対応した販売価格は是正への取り組みを進めます。

< ハウスウェア関連事業 >

ガラス食器の国内市場は人口の推移にあわせて縮小傾向にあり、将来のマーケットを見据えて新たな生産体制に移行しました。生産効率を最大限に高めるための販売戦略を進めるとともに、昨今の諸資材価格高騰に連動した価格改定の取り組みを行います。また、東京ミッドタウン八重洲内に「津軽びいどろ」の直営店をオープンしました。消費者ニーズを的確に捉え、ネットを含めたりテールビジネスの強化を図ります。

陶磁器は、国内事業はB to Cでは既存販路の再構築と新販路での売上拡大を継続するとともに、E Cビジネスの拡大を図ります。B to Bでは、選択と集中による効率化、新規顧客開拓を柱とした取り組みを進め収益力を回復します。海外事業は、安定受注の確保のため各販売セグメントの需要にあわせてリソースの選択と集中を行い、拡大施策を着実に実行することで収益力を向上します。

< 紙容器関連事業 >

屋根型飲料用紙容器の主原料である原紙は、急激な円高進行やパルプやチップ等の木質資源の世界的な需給ひっ迫の影響により価格が大幅に高騰しています。

原紙価格高騰に対応した販売価格是正を進めるとともに、国内産原紙を使用した製品提案を進めることで、仕入価格抑制・品質安定・不安定なサプライチェーンから脱却し、収益基盤の安定化を図ります。また、未来へつながる環境経営を積極的に進め、海外市場の拡大・紙器の開発など事業ドメインを拡大し、紙製品の新たな可能性を追求します。

< プラスチック容器関連事業 >

PETボトル飲料市場は、清涼飲料水市場の成長率が鈍化傾向にありますが、新型コロナウイルス感染症による行動制限が大幅に緩和されることもあり、需要が伸長する見込みです。また、業界全体としてCO2排出削減に向けたボトルtoボトルの取り組みの強化が加速しています。

姫路工場に新たに建設するPETボトル用プリフォーム場では、リサイクルPET原料を使用した資源循環型のボトルtoボトルの取り組みを推進することで、廃棄物の問題解決やCO2排出削減など社会価値の向上につながる事業活動を展開してまいります。さらに、生産性向上に努め高品質な製品を供給することで顧客満足度を高めるとともに、非清涼飲料水市場の取引拡大に向けた取り組みを進めます。

また、ウイストン(株)が製作・販売するプラスチックボトルでは、環境に配慮した新たな技術・製品開発を進めて顧客ニーズに応えていきます。

< 産業器材関連事業 >

調理器用トッププレートにおいては、差別化技術の確立により商品の付加価値を高めることに加えて、工程のIoT化を推進し生産状況をリアルタイムに見える化することなどで製造合理化を図り、安定的な生産量を確保し諸資材価格高騰の対応を図ります。また、培ってきた既存技術を応用した材料開発を進め、新商材に関する顧客獲得と販路を構築します。

< その他事業 >

抗菌剤は新型コロナウイルス感染症のパンデミックの影響もあり88期の上半期は継続して旺盛な需要がありましたが、アフターコロナや世界的なインフレの影響などにより、下期は受注が大きく落ち込みました。このような市場変化に対応するため、低価格帯の製品開発や機能改良を通じて抗菌剤の使用可能な用途拡大を進めていきます。

新事業関連では、2022年にクラウドファンディングを経て販売を開始した口臭ケアはみがき「デオグラオーラテック」は、大手販売店での取り扱いを開始しました。今後は関連製品の拡充を進めるとともに、次世代ビ

ジネスの事業化準備を始めます。

2 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、経営者が連結会社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があると認識している主要なリスクは、以下のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) ガラスびんの需要について

ガラスびん事業は、消費者ニーズの変化や他素材容器との競合等により業界全体として需要が減少し出荷量は漸減傾向にあります。業界の2022年出荷重量は前年対比103.4%と回復傾向にあるものの、今後想定を大幅に上回る需要変化が起きた場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(2) 原材料価格及びエネルギー価格の変動について

当社グループが製造工程で使用しているLNG及び電力などのエネルギーコストやPETボトル用プリフォーム等の主要原料は、原油価格又は為替相場の変動による影響を受けます。原材料につきましては、為替予約等により相場変動によるリスクヘッジを行っていますが、想定を超える価格変動等が生じた場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(3) 製品の品質について

当社グループは厳格な品質管理のもと製品の出荷を行っております。個々の取引先との規格に従い、全数検査を実施しております。万一賠償問題につながるクレームが発生した場合の対応策として、製品製造物責任による損害賠償に備えるPL保険に加入しておりますが、同保険が賠償額をすべてカバーできる保証はなく、また、当社グループへの信用問題へと発展する可能性もあり、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 取引先の信用リスクについて

当社グループは多数の取引先と掛売り取引を行っております。当社グループは信用情報の収集、与信限度額の定期的な見直し等を行い、信用リスクの回避に努めておりますが、経営環境が著しく悪化した場合等、倒産のような予期せぬ事態により債権回収に問題が発生した場合、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(5) 災害による影響について

当社グループは、生産活動が中断しないようすべての生産設備に対して定期的な防災点検及び設備保守を行っておりますが、当社グループの生産拠点である岩倉・東京・姫路・福崎工場等に大規模な地震等の災害が発生し、生産設備に大きな損害が出るなど操業停止した場合、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

また、当社グループが調達を行う企業が大規模な地震等に被災し、生産設備に大きな損害が出るなど操業が停止し、調達が不可能となった場合、当社グループの業績に大きな影響を及ぼす可能性があります。

(6) 天候の影響について

当社グループは主に国内において飲料容器を製造販売しておりますが、需要期の天候が業績に影響を及ぼします。特に冷夏や長梅雨などの天候不順に陥った場合には清涼飲料水等の需要が減少するため、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(7) 退職給付債務について

当社グループは、主に確定給付企業年金制度及び退職一時金制度を設けております。退職給付債務の将来予測に基づき定期的に年金資産の運用方針等の見直しを行っておりますが、退職給付債務を計算する上での割引率等の計算基礎の変更や年金資産の時価が下落した場合には、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(8) 投資有価証券の評価について

当社グループは、お客様や取引先の株式を保有することで中長期的な関係維持、取引拡大が可能となり、結果として当社グループの企業価値を高め、株主・投資家の皆様の利益につながると考える場合においてその株式を長期保有目的で所有しております。個別の保有株式の合理性については、毎年、取締役会において、取引関係の維持発展、当社企業価値向上への寄与度、投資効率等を勘案して判断しておりますが、証券市場における市況の悪化や投資先の業績不振により時価等が著しく下落した場合には、減損損失の計上により当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(9) 環境問題への対応について

世界共通の長期目標として温室効果ガス排出量削減の取り組みが求められています。ISHIZUKA GROUP 2030の重点ポイントとして2030年度に2015年対比CO2排出量50%削減を掲げ、2024年度中期経営計画ではロードマップ作りとその実践を進めてまいります。また、当社グループの主力製品であるPETボトル用プリフォームは石油由来の原料を使用していますが、リサイクルPET原料への生産対応能力を高めるとともに、新工場の建設を予定している姫路工場では、ボトルtoボトルの取り組みを推し進め、廃棄物の問題解決やCO2排出削減など社会価値の向上につながる事業活動を展開してまいります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当連結会計年度における当社グループ（当社及び連結子会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要並びに経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであり、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末において判断したものであります。

なお、当連結会計年度の期首より、「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 2020年3月31日）等を適用しております。これに伴い、当連結会計年度における売上高は、前連結会計年度と比較して大きく減少しております。そのため、当連結会計年度における経営成績に関する売上高の説明については、前期比（％）を記載せず（前期比 - ％）として表示しております。

詳細は、「第5 経理の状況 連結財務諸表 注記事項（会計方針の変更）」に記載のとおりであります。

(1) 経営成績

当連結会計年度におけるわが国経済は、新型コロナウイルス感染症の影響による行動制限が緩和され、経済活動に持ち直しの動きがみられる一方、ウクライナ情勢をめぐる地政学的リスクの高まりに加えて、欧米諸国と日本の金融政策の違いなどから為替が円安に進行し、エネルギー価格をはじめとする諸資材価格が高騰するなど非常に厳しい状況で推移しました。

このような状況の中、長期的な視点で会社の方向を示すべきと考え、2019年に制定した新たな企業理念を踏まえ、ISHIZUKA GROUP 2030～挑戦し続けることにより、躍動する企業へ～を策定しました。また、これに基づき、2024年度中期経営計画「変化するスピードに負けない」を当期よりスタートし、2024年度連結営業利益3,500百万円、中堅・若手人財の育成への取り組み、2030年CO2排出量50%削減（2015年対比）に向けたロードマップ作りとその実践に取り組んでおります。

業績につきましては、地政学的リスクの高まりに加えて為替が円安に進行したことにより、LNG及び電力などのエネルギー価格が高騰し、これに対する一部値上げとグループを挙げてのコスト削減に取り組むものの、グループ全体の売上高は56,749百万円（前期比 - ％）、営業利益2,210百万円（前期比15.4%減）、経常利益2,317百万円（前期比17.0%減）となりました。また、ガラスびん事業の生産拠点である姫路工場の生産停止に伴う損失として工場閉鎖関連損失を計上したことにより、親会社株主に帰属する当期純利益252百万円（前期比88.8%減）となりました。

セグメントごとの業績は、次のとおりであります。

< ガラスびん関連事業 >

ガラスびんは、飲食店向けの需要が回復するとともに、エネルギー価格をはじめとした諸資材価格高騰に対する製品への価格転嫁が徐々に市場に浸透したことにより、売上高は14,539百万円（前期比 - ％）となりました。

< ハウスウェア関連事業 >

ガラス食器は、企業向けの業務用品及び景品の受注と「アデリアレットロ」などの一般市場向けの販売が堅調に推移しました。陶磁器は、海外のエアライン向けの受注が大きく回復したことにより、セグメント全体の売上高は13,244百万円（前期比 - ％）となりました。

< 紙容器関連事業 >

紙容器は、製品の主原料である原紙の調達コスト高騰に対する販売価格は正の取り組みを進めており、売上高は7,147百万円（前期比 - ％）となりました。

< プラスチック容器関連事業 >

PETボトル用プリフォームは、最終製品の価格改定の影響もありましたが、行動制限の緩和や夏場の猛暑の影響もあり、主要ユーザーからの受注が増加し過去最高本数の出荷となり、売上高は14,526百万円（前期比 - ％）となりました。

< 産業器材関連事業 >

産業器材は、調理器用トッププレートの受注が堅調に推移し、売上高は2,498百万円（前期比 - ％）となりました。

< その他事業 >

抗菌剤は、海外からの旺盛な需要が落ち着き、世界的なインフレ等の影響もあり出荷が伸び悩みました。金属キャップは、酒類及び医薬品向けともに堅調に推移し、セグメント全体の売上高は4,793百万円（前期比 - ％）となりました。

生産、仕入、受注及び販売の実績は次のとおりであります。なお、当連結会計年度より、「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 2020年3月31日）等を適用しているため、生産実績、受注実績及び販売実績の前期比（％）を記載せずとして表示しております。

生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額(百万円)	前期比(%)
ガラスびん関連	11,422	-
ハウスウェア関連	8,648	-
紙容器関連	7,018	-
プラスチック容器関連	14,766	-
産業器材関連	2,471	-
報告セグメント計	44,327	-
その他	3,216	-
合計	47,544	-

(注) 金額は平均販売価格によっており、セグメント間の内部振替前の数値によっております。

仕入実績

当連結会計年度における商品仕入実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額(百万円)	前期比(%)
ガラスびん関連	1,018	148.9
ハウスウェア関連	1,453	95.9
紙容器関連	93	54.0
プラスチック容器関連	149	106.5
産業器材関連	1	28.8
報告セグメント計	2,716	107.9
その他	48	154.4
合計	2,765	108.4

(注) 金額は仕入価格によっており、セグメント間の取引については相殺消去しております。

受注実績

当連結会計年度における受注状況をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	受注高(百万円)	前期比(%)	受注残高(百万円)	前期比(%)
ガラスびん関連	13,814	-	2,822	-
ハウスウェア関連	7,885	-	1,229	-
紙容器関連	7,270	-	1,396	-
プラスチック容器関連	15,122	-	2,773	-
産業器材関連	2,509	-	69	-
報告セグメント計	46,602	-	8,291	-
その他	2,974	-	225	-
合計	49,576	-	8,517	-

(注) ハウスウェア関連のうち、直需専用品等は受注生産を行っておりますが、一般品等は見込生産を行っておりません。

販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額(百万円)	前期比(%)
ガラスびん関連	14,539	-
ハウスウェア関連	13,244	-
紙容器関連	7,147	-
プラスチック容器関連	14,526	-
産業器材関連	2,498	-
報告セグメント計	51,955	-
その他	4,793	-
合計	56,749	-

(注) 1. セグメント間の取引については相殺消去しております。

2. 最近2連結会計年度の主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は次のとおりであります。

相手先	前連結会計年度		当連結会計年度	
	金額(百万円)	割合(%)	金額(百万円)	割合(%)
コカ・コーラ ボトラーズジャパン株式会社	12,865	18.5	-	-
アサヒ飲料株式会社	7,763	11.2	-	-

3. 当連結会計年度においては、総販売実績に対する割合が10%未満であるため記載を省略しております。

(2) 翌連結会計年度の目標とする経営指標

1 「経営方針、経営環境及び対処すべき課題等」(2) 中長期的な経営戦略及び目標とする経営指標に記載のとおり、2024年度(2025年3月期)の連結営業利益3,500百万円を目標として積極的な取り組みを進めてまいりますが、2024年3月期の連結経営成績につきましては、売上高57,000百万円(前期比0.4%増)、営業利益1,800百万円(前期比18.6%減)、経常利益1,500百万円(前期比35.3%減)、親会社株主に帰属する当期純利益1,200百万円(前期比375.8%増)を見込んでおります。エネルギー価格をはじめとする諸資材価格の高止まりについては、それに対する販売価格改定の取り組み並びに製造工程の合理化を通じたコスト低減施策を実行してまいりますが、プラスチック容器関連のPETボトル用プリフォーム新工場の立ち上げの影響もあり、営業利益及び経常利益は減益となる見通しです。

(3) 財政状態

当連結会計年度末の財政状態につきましては、資産合計は86,536百万円(前期比4,439百万円増)、負債合計は57,787百万円(前期比4,553百万円増)、純資産合計は28,749百万円(前期比114百万円減)となりました。新たに姫路工場に建設するPETボトルプリフォーム用工場の設備投資に係る資金調達を実行したことにより、長期借入金が大きく増加しました。そのため、資産及び負債ともに増加しました。純資産は前期対比で大きな増減はなく、これらの結果により自己資本比率は29.0%(前連結会計年度末は30.8%)となりました。

(4) キャッシュ・フロー

当連結会計年度における現金及び現金同等物(以下「資金」という。)は、前連結会計年度末に比べ744百万円増加し、6,069百万円となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果増加した資金は、2,087百万円(前年同期は4,093百万円の資金増加)となりました。資金増加の主な要因は、税金等調整前当期純利益及び減価償却費によるものです。

一方、資金減少の主な要因は、法人税等の支払額、未収入金の増加及び売上債権の増加によるものです。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果使用した資金は、5,593百万円(前年同期は548百万円の資金減少)となりました。資金減少の主な要因は、有形固定資産の取得による支出によるものです。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果増加した資金は、4,140百万円(前年同期は1,868百万円の資金減少)となりました。資金増加の主な要因は、長期借入による収入によるものです。

一方、資金減少の主な要因は、短期借入金の減少及びリース債務の返済による支出によるものです。

また、金融機関と総額2,000百万円のコミットメントライン契約を締結しており、資金の流動性を確保しております。

(5) 資本の財源及び資金の流動性

当社グループの主な運転資金需要は、製品製造のための原燃料や販売費及び一般管理費等の営業費用であります。必要な手元資金を確保しつつ、突発的な資金手当てにつきましては、短期資金調達枠の利用により機動的に対応することで流動性リスクに備えています。

また、今後の事業戦略に必要な設備投資やM & A等の資金需要につきましては、必要に応じて資金調達を行ってまいります。

(6) 重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づき作成しております。この連結財務諸表を作成するにあたって、資産、負債、収益及び費用の報告額に影響を及ぼす見積り及び仮定を用いておりますが、これらの見積り及び仮定に基づく数値は、実際の結果と異なる可能性があります。連結財務諸表の作成にあたって用いた会計上の見積り及び仮定のうち、重要なものは「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等(1)連結財務諸表 注記事項(重要な会計上の見積り)」に記載しております。

4 【経営上の重要な契約等】

相手方の名称	契約内容	合併会社名	契約年月日
遠東新世紀グループ(台湾)	国内におけるペットボトルリサイクルに関する合併事業	遠東石塚グリーンペット株式会社	2012年10月18日
王子ホールディングス株式会社	飲料用紙容器に関する合併事業	石塚王子ペーパーパッケージング株式会社	2020年9月18日

5 【研究開発活動】

当社グループの研究開発活動は、主として有価証券報告書提出会社である石塚硝子(株)で行っております。なお、ハウスウェア関連の陶磁器分野及び産業器材関連では鳴海製陶(株)、並びにプラスチック容器関連では日本パリソン(株)においても研究開発活動を実施しております。

当連結会計年度におけるセグメントごとの研究開発活動は次のとおりであります。

ガラスびん関連

ガラスびん分野においては、生産効率及び品質の向上を目的とした取り組みを実施しており、特定品種・部位の品質不良の検出精度が上がりました。更なる生産効率及び品質面の向上に取り組むとともに、意匠性を高めることでガラスびんの付加価値の向上を図り、新製品の上市へ向けた開発を継続して進めてまいります。

当連結会計年度に支出した研究開発費は、19百万円であります。

ハウスウェア関連

ガラス食器分野においては、品質の向上を目的として、検査機を中心とした品質管理工程の改善及び開発の取り組みを実施しております。環境面については、省エネ及びCO2排出量削減を目的とした設備運用改善や開発を実施しております。また、成形技術を向上させることで新しいデザイン形状の多様なニーズに更に対応可能としております。

陶磁器分野では、県内の大学や公的機関と共同研究を実施し、主力ボンチャイナ原料の安定供給、リサイクル原料の有効利用の研究開発、機能性釉薬を継続開発しています。また、2022年新あいち創造研究開発補助金の採択を受け、新たな原材料の加工方法や評価方法並びに試験装置の導入を行い、自社技術の更なる向上を進めています。

当連結会計年度に支出した研究開発費は、115百万円であります。

紙容器関連

紙容器分野においては、生産効率及び品質の向上を目的とした取り組みと多様なニーズに対応すべく研究開発を行っています。当連結会計年度においては、新たな紙器事業へ向けた生産体制の変更と新設備を導入し、既存紙容器加工の更なる追求と新形状容器開発を強化いたしました。原材料では、顧客ニーズに応えられる原紙開発継続と品質向上に組み、国内原紙への切り替えを加速しております。また、環境に配慮した容器開発と紙容器のリサイクルにおける理想的な循環型社会への実現に向けた活動を進めてまいります。

当連結会計年度に支出した研究開発費は、47百万円であります。

プラスチック容器関連

プラスチック容器分野においては、環境変化への適応と多様なニーズに応えるべく、R & Dセンターで各種の研究開発を行っております。当連結会計年度においては、CO2排出量削減につながる取り組みとして、PET容器の軽量化、PETボトル用プリフォームの生産性及び品質の向上に関する調査研究、更に新たな生産方式の調査検討を行いました。あわせて、顧客ニーズに対応すべく新機能付与や意匠性向上などを目的とした容器開発を進めました。また、新分野向けのPET容器開発にも継続して取り組んでいます。

当連結会計年度に支出した研究開発費は、249百万円であります。

産業器材関連

産業器材分野においては、調理器用トッププレートや遠赤ヒーターパネル生産で、顧客ニーズに応えられる材料開発を行っております。当連結会計年度においては、品質や生産効率の向上・安定化、新たな材料開発にも組み、モデルチェンジ機種や派生追加機種を中心に継続受注をしております。また、製造では原燃材料高騰に伴う原価アップを抑制するための合理化を促進し、トッププレート加工や印刷工程での生産効率向上を目的とした設備導入にも取り組んでいます。

当連結会計年度に支出した研究開発費は、47百万円であります。

その他

「有機無機ハイブリッドガラス」については、封止材・接着剤用途としてメーカーに向けた適合開発を継続し、「抗菌剤・抗ウイルス剤」については、フィルム市場/繊維市場への販路開拓を継続実施してきました。「消臭剤」については、オーラル製品の開発に成功し、2022年にクラウドファンディングの実施を経て大手パラエティーションにて販売を開始いたしました。「テーブルウェアレンタルサービス」については2020年7月のリスタート以降、エリア拡大、関連業種とのコラボなどを図り、B to CからB to Bへの展開を継続しております。

また、オープンイノベーションから生まれたガラス家電プロダクトのひとつである「Crystal Warm Plate」は、グループ会社の販路を活用した上市を実施してホテル、レストランへの販売を開始しました。

当連結会計年度に支出した研究開発費は、264百万円であります。

当連結会計年度に当社グループが支出した研究開発費は、合計で743百万円であります。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当社グループでは、当連結会計年度全体で5,528百万円の設備投資を実施いたしました。

セグメントごとの設備投資は、次のとおりであります。

ガラスびん関連においては、金型の取得及び設備の維持更新などを中心に449百万円の設備投資を実施いたしました。

ハウスウェア関連においては、金型の取得及び溶解炉更新投資などを中心に767百万円の設備投資を実施いたしました。

紙容器関連においては、福崎工場の設備の維持更新などに82百万円の設備投資を実施いたしました。

プラスチック容器関連においては、新たに建設するPETボトル用プリフォーム工場の設備投資を順次行っていることなどにより3,923百万円の設備投資を実施いたしました。

産業器材関連においては、設備の維持更新などに67百万円の設備投資を実施いたしました。

その他においては、設備の維持更新などに237百万円の設備投資を実施いたしました。

2 【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、以下のとおりであります。

(1) 提出会社

2023年3月20日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の 内容	帳簿価額(百万円)						従業員数 (名)
			建物及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	土地 (面積㎡)	リース 資産	その他	合計	
岩倉工場 (愛知県岩倉市)	ガラスびん 関連	びん生産設備	508	1,000	1,405 (34,533)	143	346	3,405	134 [4]
	ハウスウェア 関連	食器生産設備	338	405	1,104 (27,135)	-	667	2,516	101 [3]
	プラスチック 容器関連	プラスチック 容器生産 設備	691	19	412 (10,140)	-	5	1,129	- [-]
東京工場 (茨城県猿島郡境町)	その他	賃貸設備	225	9	1,754 (93,824)	291	0	2,281	- [-]
	プラスチック 容器関連	プラスチック 容器生産 設備	1,790	13	1,361 (72,784)	128	2	3,295	- [-]
姫路工場 (兵庫県姫路市)	その他	賃貸設備	693	0	1,410 (105,321)	-	0	2,104	- [-]
	プラスチック 容器関連	プラスチック 容器生産 設備	-	-	310 (23,191)	-	1,718	2,029	- [-]
福崎工場 (兵庫県神崎郡福崎町)	紙容器関連	紙容器生産 設備	292	-	493 (23,382)	-	-	785	- [-]

(2) 国内子会社

2023年3月20日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の 内容	帳簿価額(百万円)						従業員数 (名)
				建物及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	土地 (面積㎡)	リース 資産	その他	合計	
ウイストン (株)	本社 (愛知県海部郡蟹江町)	プラスチック 容器関連	生産設備	64	498	224 (3,817)	-	51	838	61 [25]
日本パリソン (株)	東京工場 (茨城県猿島郡境町)	プラスチック 容器関連	生産設備	267	767	- (-)	539	131	1,705	139 [82]
	岩倉工場 (愛知県岩倉市)			341	269	- (-)	1,288	80	1,980	54 [39]

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の 内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名)	
				建物及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	土地 (面積㎡)	リース 資産	その他		合計
久金属工業 (株)	本社 (大阪市西成 区)	その他	生産設 備	39	9	729 (6,803)	-	18	797	38 [1]
	滋賀工場 (滋賀県甲賀 市)			45	111	191 (36,917)	-	4	352	22 [1]
鳴海製陶(株)	本社 (愛知県名古屋 市緑区)	産業器材 関連	生産設 備	105	108	1,172 (18,611)	-	29	1,415	62 [25]
石塚王子ペー パーパッケージ ジング(株)	本社 (兵庫県神崎 郡福崎町)	紙容器関連	生産設 備	7	527	- (-)	47	23	605	143 [12]

(3) 在外子会社

2023年3月20日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の 内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名)	
				建物及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	土地 (面積㎡)	リース 資産	その他		合計
PT. NARUMI INDONESIA	インドネシ ア工場 (インドネ シア)	ハウスウェ ア関連	生産設備	68	81	- (33,390)	16	26	193	405 [51]

- (注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は、工具、器具及び備品並びに建設仮勘定の合計であります。
2. 従業員数の [] は臨時従業員数を外書してあります。
3. 提出会社の東京工場及び姫路工場の土地、建物及び構築物等の一部を遠東石塚グリーンペット株式会社に賃貸しております。
4. 日本パリソン株式会社及び石塚王子ペーパーパッケージジング株式会社は、建物及び構築物、機械装置及び運搬具、その他の一部並びに土地を提出会社から賃借しております。
5. PT. NARUMI INDONESIAの土地面積は、土地使用権に係る面積であります。

3 【設備の新設、除却等の計画】

当連結会計年度末現在における重要な設備の新設、除却等の計画は次のとおりであります。

(1) 重要な設備の新設等

セグメントの名称	投資予定額(百万円)		設備投資の主な内容・目的
	総額	実行額	
プラスチック容器関連	13,000	3,524	2022年に操業を停止したガラスびん関連事業の姫路工場において、新たに日本パリソン(株)のPETボトル用ブリフォーム工場を建設します。新工場では、リサイクルPET原料を使用した資源循環型の「ボトルtoボトル」の取り組みを推進し、廃棄物の問題解決やカーボンニュートラルに貢献することで、顧客・社会的ニーズへ応えてまいります。

(2) 重要な設備の除却等

該当事項はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	14,000,000
計	14,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2023年3月20日)	提出日現在 発行数(株) (2023年6月16日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	4,219,554	4,219,554	東京証券取引所 (スタンダード市場) 名古屋証券取引所 (プレミアム市場)	単元株式数 100株
計	4,219,554	4,219,554		

(2) 【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2019年2月20日 (注)1	500	4,129	360	6,271	360	3,317
2019年3月15日 (注)2	90	4,219	73	6,344	73	3,391

(注)1. 有償 一般募集 発行株式数 500千株 発行価格 1,706円 発行価額 1,626.84円 資本組入額 720.12円

2. 有償 第三者割当(オーバーアロットメントによる売出しに関連した第三者割当増資)

発行株数 90千株 発行価格 1,626.84円 資本組入額 813.42円 割当先 S M B C 日興証券株式会社

(5) 【所有者別状況】

2023年3月20日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満 株式の状況 (株)
	政府及び地 方公共団体	金融機関	金融商品取 引業者	その他の 法人	外国法人等		個人 その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	18	14	130	27	19	6,472	6,680	-
所有株式数 (単元)	-	13,128	628	8,024	3,475	23	16,679	41,957	23,854
所有株式数 の割合(%)	-	31.29	1.50	19.12	8.28	0.05	39.76	100.00	-

(注) 自己株式は「個人その他」に339単元、「単元未満株式の状況」に33株が含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2023年3月20日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式 (自己株式を除く。)の総数に対する 所有株式数の割合(%)
明治安田生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内二丁目1番1号	219	5.24
INTERACTIVE BROKERS LLC (常任 代理人 インタラクティブ・ブ ローカーズ証券株式会社)	ONE PICKWICK PLAZA GREENWICH, CONNEC TICUT 06830 U.S.A (東京都千代田区霞が関三丁目2 番5号)	207	4.96
日本スタートラスト信託銀行株 式会社(信託口)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	179	4.28
株式会社みずほ銀行	東京都千代田区大手町一丁目5番5号	173	4.14
第一生命保険株式会社	東京都千代田区有楽町一丁目13番1号	150	3.58
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内二丁目7番1号	131	3.14
東朋テクノロジー株式会社	名古屋市中区栄三丁目10番22号	130	3.10
株式会社日本カストディ銀行(信 託口)	東京都中央区晴海一丁目8番12号	113	2.71
愛知時計電機株式会社	名古屋市熱田区千年一丁目2番70号	96	2.29
石塚芳三	名古屋市東区	88	2.12
計	-	1,490	35.61

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2023年3月20日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 33,900	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 4,161,800	41,618	-
単元未満株式	普通株式 23,854	-	-
発行済株式総数	4,219,554	-	-
総株主の議決権	-	41,618	-

【自己株式等】

2023年3月20日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数の 割合(%)
石塚硝子株式会社	愛知県岩倉市川井町1880 番地	33,900	-	33,900	0.80
計	-	33,900	-	33,900	0.80

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	256	388,700
当期間における取得自己株式	82	128,002

(注)当期間における取得自己株式には、2023年5月21日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他	-	-	-	-
保有自己株式数	33,933	-	34,015	-

(注)当期間における保有自己株式数には、2023年5月21日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び売渡による株式は含まれておりません。

3 【配当政策】

当社は、利益配分につきましては、収益状況に対応した配当を行うことを基本としておりますが、何よりも先ず安定的な配当の継続を重要な方針といたしております。内部留保につきましては、財務体質の強化を進めるとともにその充実に図り堅実な経営基盤の確保に努めてまいります。

当社は、期末配当による年1回の剰余金の配当を行うことを基本方針としております。

また、「会社法第459条第1項の規定に基づき、取締役会の決議をもって剰余金の配当等を行うことができる。」旨を定款に定めております。

当事業年度の剰余金の配当につきましては2023年5月31を効力発生日として、期末配当を1株当たり35円とさせていただきますことを2023年4月26日開催の取締役会で決定いたしました。

決議年月日	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)
2023年4月26日 取締役会決議	146	35

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

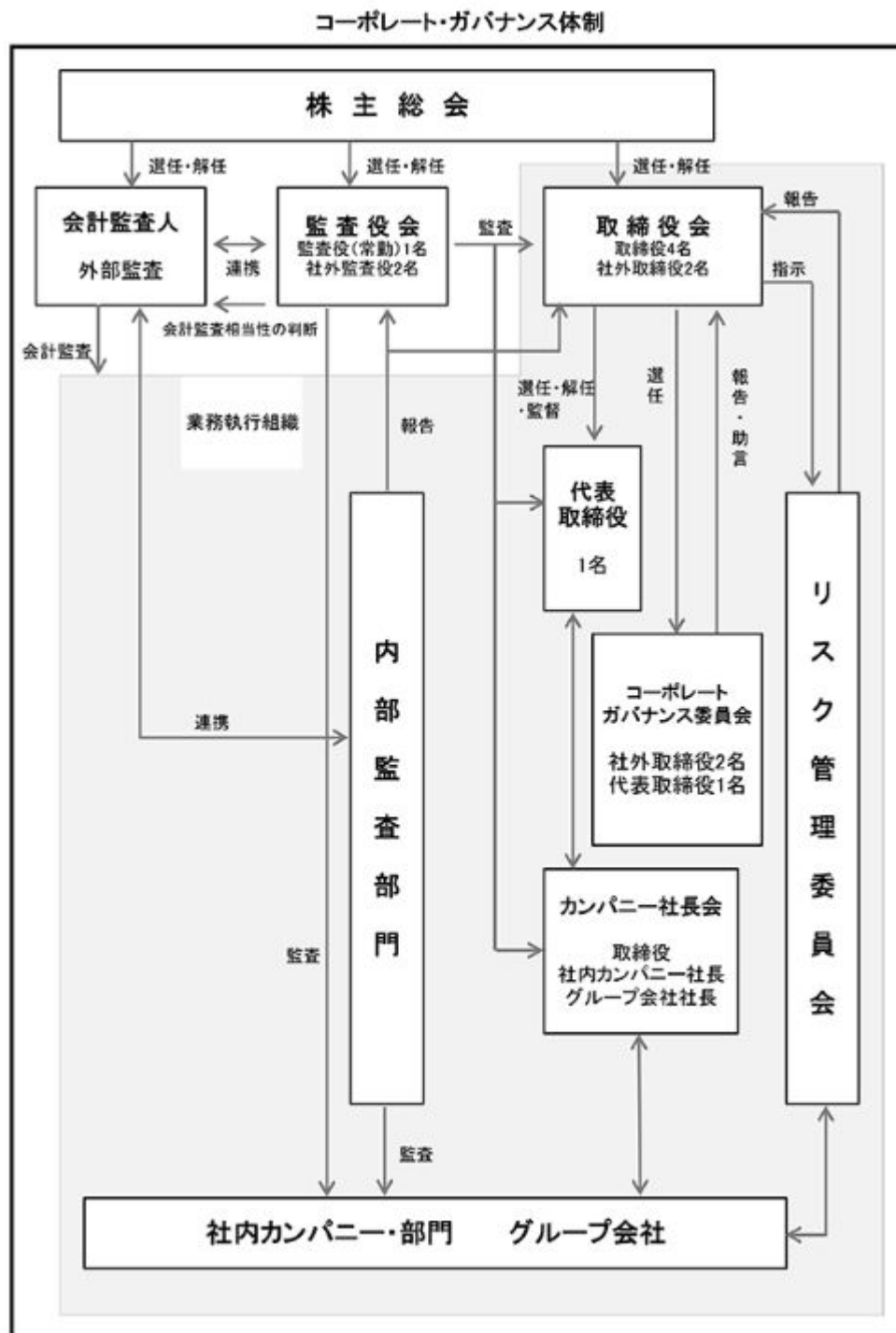
コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、くらしに彩り、豊かさと安心をお届けすることを<わたしたちの使命>とし、価値あるモノづくりとともに、社会で輝くヒトを育て、未来に向かうユメを築くことを<わたしたちのビジョン>としております。また、創業以来育んできた伝統と歴史を心に刻み、更なる飛躍に向けて、何事も「誠実」に向き合うこと、失敗を恐れることなく常に「挑戦」を続けること、そして一人ひとりが「成長」を忘れないことの3つを<わたしたちの約束>とし、社会に貢献する企業を目指して事業活動を行っております。この企業理念を企業活動の基本として、企業価値の向上を最重要課題として経営を推進しております。

また、株主をはじめすべてのステークホルダー(利害関係者)を重視し、経営の透明性・健全性・遵法性はもとより、適時適切な情報開示を通じて企業経営に対する信頼性の向上を得るため、コーポレート・ガバナンスの強化を経営上の最重要課題の一つとして取り組んでおります。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当社における企業統治の体制の概要は以下のとおりであります。



機関ごとの構成メンバーは以下のとおりであります（ は議長）。

役職名	氏名	取締役会	監査役会	コーポレート ガバナンス委 員会	カンパニー 社長会	リスク管理 委員会
代表取締役 社長執行役員	石塚 久継					
取締役 常務執行役員	畔柳 博史					
取締役 執行役員	北山 聡					
取締役 執行役員	下宮 尚己					
社外取締役	後藤 武夫					
社外取締役	安北 千差					
常勤監査役	大橋 茂夫					
社外監査役	加藤 茂					
社外監査役	小栗 悟					
各執行役員		(注)			(注)	(注)
グループ会社 社長		(注)			(注)	(注)

(注) 会議の目的に応じて適宜参加者を判断しております。

各機関の目的は以下のとおりであります。

(イ)取締役会

取締役会を定期的に(1か月に1回)、また必要に応じて随時開催し、法令、定款に定める事項や経営戦略の立案、その他経営上の重要事項の意思決定と職務執行の監督・監視など全社経営機能を担っております。

また、直接的な職務執行責任を明確に分離するため、社内カンパニー制及び執行役員制度を導入し、ガバナンス体制の充実を図っております。

(ロ)監査役・監査役会

後記「(3) 監査の状況 監査役監査の状況」に記載のとおりであります。

(ハ)コーポレートガバナンス委員会

コーポレートガバナンス委員会では、取締役の報酬、役員の指名並びにその他の企業統治に関する方針について審議・答申することにより、意思決定プロセスの透明性・客観性を高め、コーポレートガバナンス体制をより強化することを目的としております。

(ニ)カンパニー社長会

取締役会で決定された重要事項の伝達と各カンパニー及びグループ会社における職務執行状況に関する討議を目的として、定期的に(1か月に1回)カンパニー社長会を開催しております。取締役、執行役員、グループ会社の社長を構成メンバーとし、常勤監査役が参加することで、監査の実効性を高めております。

(ホ)リスク管理委員会

当社グループにおいて発生する可能性のあるリスクを管理するための体制と緊急的に発生したリスクに対して、被害を最小限抑えるための対策を確立し、グループの事業を継続できるようにすることを目的として設置しております。定期的(3か月に1回)な開催のほか、緊急的な事案に対しては必要性に応じて随時開催しております。

当該体制を採用する理由

上記の体制により、経営の機動性、透明性、健全性を確保し、社外役員による経営監視機能が有効に働くことで、より適切で効率的な企業統治体制が確立すると判断して、この体制を採用しております。

企業統治に関するその他の事項

(株式会社)の支配に関する基本方針について)

(イ)基本方針の内容

当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方としては、当社の企業理念、企業価値のさまざまな源泉、当社を支えるステークホルダーとの信頼関係を十分に理解し、当社の企業価値ひいては株主共同の利益を中長期的に確保、向上させる者でなければならないと考えております。したがって、企業価値ひいては株主共同の利益を毀損するおそれのある不適切な大規模買付提案又はこれに類似する行為を行う者は、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者として不適切であると考えます。

(ロ)不適切な支配の防止のための取り組み

当社は上記基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防

止する取り組みとして「当社株式の大規模買付行為に関する対応策(買収防衛策)」(以下「本プラン」といいます。)を導入しております。

本プランでは、当社株式に対し議決権割合が20%以上となるような大規模買付行為を行おうとする者(以下「大規模買付者」といいます。)が大規模買付行為実施前に遵守すべき、大規模買付行為に関する合理的なルール(以下「大規模買付ルール」といいます。)を定めております。大規模買付ルールは、当社株主の皆様が大規模買付行為に応じるか否かを判断するために必要な情報や、現に当社の経営を担っている当社取締役会の意見を提供し、当社株主の皆様が当社取締役会の代替案の提示を受ける機会を確保することを目的としております。また、本プランを適正に運用し、当社取締役会によって恣意的な判断がなされることを防止し、当社における決定の合理性・公正性を担保するため、当社の業務執行を行う経営陣から独立している社外役員並びに社外有識者で構成される独立委員会を設置しております。当社取締役会は、大規模買付者に対し、大規模買付行為に関する必要かつ十分な情報を当社取締役会に提供することを要請し、当該情報の提供完了後、大規模買付行為の評価検討のための期間を設定し、当社取締役会としての意見形成や必要に応じ代替案の策定を行い、公表いたします。大規模買付者が、大規模買付ルールを遵守した場合は、当社取締役会は、原則として対抗措置を講じません。しかし、大規模買付ルールを遵守しない場合や、遵守している場合であっても、当該大規模買付行為が、当社の企業価値ひいては株主共同の利益を著しく損なうと当社取締役会が判断した場合には、例外的に、独立委員会の勧告を最大限尊重し、必要かつ相当な範囲内で、また、必要に応じて株主の皆様のご意思を確認の上で、会社法その他の法律及び当社定款が認める対抗措置を講じることがあります。

本プランの有効期間は3年間(2025年6月に開催予定の定時株主総会終結時まで)となっておりますが、有効期間中であっても、株主総会又は取締役会の決議により本プランは廃止されることがあります。また、随時見直しを行い、株主総会における株主の皆様のご承認を得て本プランの変更を行うことがあります。

本プランの詳細につきましては、当社ホームページに掲載の「当社株式の大規模買付行為に関する対応策(買収防衛策)の継続について」(2022年5月9日付)をご参照ください。

(参考URL <https://www.ishizuka.co.jp/news/index.html>)

(ハ)不適切な支配の防止のための取り組みについての取締役会の判断

本プランは、買収防衛策に関する指針の要件を充足し、コーポレートガバナンス・コードの「原則1 - 5 いわゆる買収防衛策」の内容も踏まえていること、株主共同の利益の確保・向上の目的をもって継続されていること、合理的な客観的発動要件を設定していること、独立性の高い社外者の判断を重視し、情報開示をしていること、株主意思を重視するものであること、デッドハンド型買収防衛策やスローハンド型買収防衛策ではないこと、の理由から会社の支配に関する基本方針に沿い、当社の企業価値ひいては株主共同の利益に合致し、当社役員の地位の維持を目的とするものではないと考えております。

(内部統制システム整備の状況)

(イ)取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- ・取締役は経営理念や石塚硝子グループコンプライアンス行動規範に基づき、法令及び定款に適合するための体制整備に努める。
- ・コンプライアンス全体を統括する組織として、コンプライアンス委員会を設置し、コンプライアンス上の重要な事項を審議する。

(ロ)取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

取締役の職務の執行に係る情報については、情報管理規程、その他の社内規程に基づき、その保存媒体に応じて安全かつ検索性の高い状態で記録し、適正に保存及び管理する。

(ハ)当社及び子会社から成る企業集団(以下「当社グループ」という)における損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- ・リスク管理の実効性を確保し、適切な対応を図るため、リスク管理委員会を設置し、当社グループのリスク管理の基本方針並びにその推進体制、その他重要事項を決定する。これに基づき、リスクの未然防止などの事前対応とリスクが顕在化したときの事後対応を行う。
- ・リスク管理委員会の下にリスク管理推進委員会を設置し、当社グループのリスクを抽出し、低減策を実行する。

- (ニ)当社グループの取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
- ・石塚硝子グループ中期経営計画及び年度経営計画を策定し、部門毎に方針を明確化し、一貫した管理を行う。
 - ・カンパニー制及び執行役員制により、担当業務と職務権限を明確にし、職務の効率化を図る。
- (ホ)当社グループの使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
- ・石塚硝子グループコンプライアンス行動規範に基づき、研修等を通じて、当社グループのすべての役員及び社員等に対しコンプライアンスの徹底を図る。
 - ・内部通報制度の仕組みを定め、不正行為等の早期発見と是正を図るとともに、内部監査部門による継続的監査を行う。
- (ヘ)当社グループにおける業務の適正を確保するための体制
- ・当社グループの業務が法令及び定款に適合することを確保するため、経営理念と行動指針を当社グループ共通のものとし、人的交流等を通じてその浸透を図る。
 - ・石塚硝子グループ管理規程に基づき、当社グループ相互の責任と権限を定め、業務の組織的かつ効率的な運営を図る。
 - ・業務報告会を通じて、当社グループの情報の共有と経営の適正性の確保に努める。
- (ト)監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項
- 監査役は、職務を補助するため、監査役の要請により合理的な範囲で監査役スタッフを置く。
- (チ)前号の使用人の取締役からの独立性に関する事項
- ・監査役は、職務を補助する使用人の人事に係る事項については、事前に監査役会の同意を得る。
 - ・監査役スタッフは、監査役の要請に基づき当該職務を行う期間は、監査役の指揮命令下にあるものとし、取締役からの独立性を確保する。
- (リ)取締役及び使用人が監査役に報告するための体制その他の監査役への報告に関する体制
- ・当社グループの役員及び社員等は、主な業務執行について、必要に応じ監査役に報告するほか、事業運営に重要な影響を与える事項については、都度報告をする。
 - ・内部通報制度の担当部署は、当社グループの役員及び社員等からの内部通報の状況について、必要に応じて、監査役に報告をする。
 - ・報告をした役員及び社員等に対し、当該報告したことを理由として不利益な取り扱いを行うことを禁止し、周知徹底を行う。
- (ヌ)その他監査役が監査を実効的に行われることを確保するための体制
- ・取締役は、監査役監査の実効性を高めるために、監査役の重要会議への出席や重要文書の閲覧、工場・子会社の現地監査等の監査活動に積極的に協力する。
 - ・内部監査部門は、監査役との連携を密にし、監査役に対し内部監査結果の報告をする。
 - ・監査役が職務の遂行において生ずる費用の請求をするときは、当該請求に係る費用が監査役の職務の執行に必要なものでない認められる場合を除き、これを拒むことができない。
- (ル)反社会的勢力排除に向けた基本的な考え方
- 当社グループは、石塚硝子グループコンプライアンス行動規範において市民生活の秩序や安全及び企業活動に脅威を与える反社会的勢力に対し、毅然とした姿勢で対応する旨を定め、反社会的勢力との関係排除に向け、当社グループ全体で企業倫理の浸透に取り組む。また、平素より関係機関等からの情報収集に努め、所轄警察、顧問弁護士等と緊密に連携し適切に対処する体制を構築する。
- (ロ)財務報告の信頼性を確保するための体制
- 当社グループは、財務報告の信頼性を確保するため、金融商品取引法に定める内部統制報告書の有効かつ適切な提出のための内部統制システムを構築するとともに、そのシステムが適正に機能することを継続的に評価し、必要な是正を行うことにより金融商品取引法及びその他の関係法令等に対する適合性を確保する。

(社外取締役及び社外監査役との責任限定契約)

当社と社外取締役及び社外監査役は、会社法第427条第1項の規定により、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、法令が規定する額であります。これは社外取締役及び社外監査役が期待される役割を十分に発揮できるよう、また優秀な人材の招聘を容易にすることを目的とするものであります。

(取締役及び監査役の責任免除)

当社は、会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議をもって同法第423条第1項の行為に関する取締役(取締役であった者を含む)及び監査役(監査役であった者を含む)の責任を法令の限度において免除することができる旨を定款に定めております。これは取締役及び監査役が職務を遂行するにあたり、期待される役割を十分に発揮できる環境を整備することを目的とするものであります。

（役員等賠償責任保険契約の内容の概要）

当社は、会社法第430条の3第1項に規定する役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結しております。当該保険契約の被保険者の範囲は当社及び当社の子会社の会社法上の取締役及び監査役、並びに当社が採用する執行役員制度上の執行役員とし、被保険者は保険料を負担しておりません。当該保険契約により保険期間中に被保険者に対して提起された損害賠償請求に係る訴訟費用及び損害賠償金等が填補されることとなります。

ただし、被保険者の職務の執行の適正性が損なわれないようにするため、当該被保険者が法令違反の行為であることを認識して行った行為に起因して生じた損害の場合には填補の対象とならないなど、一定の免責事由があります。

（取締役の定数）

当社の取締役は、8名以内とする旨を定款に定めております。

（取締役の選任の決議要件）

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款に定めております。また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨定款に定めております。

（剰余金の配当等の決定機関）

当社は、剰余金の配当等の会社法第459条第1項各号に定める事項について、法令に別段の定めがある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議により定める旨を定款に定めております。これは、剰余金の配当等を取締役会の権限とすることにより、株主への機動的な利益還元を行うことを目的とするものであります。

（自己株式の取得）

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議をもって自己株式を取得することができる旨を定款に定めております。これは経営環境の変化に対応した機動的な資本政策の遂行を可能とするため、市場取引等により自己株式を取得することを目的とするものであります。

（株主総会の特別決議要件）

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【役員の状況】

男性8名 女性1名 (役員のうち女性の比率11.1%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (百株)
代表取締役 社長執行役員	石塚 久継	1965年4月2日	1990年4月 株式会社富士銀行入行 1997年9月 当社入社 2004年6月 取締役兼執行役員 ガラスびんカンパニー社長 2009年6月 常務取締役 2011年6月 取締役副社長営業部門・管理部門管掌 2013年6月 代表取締役社長 2015年2月 鳴海製陶株式会社代表取締役会長 2018年6月 代表取締役社長執行役員(現任) 2021年3月 遠東石塚グリーンペット株式会社代表取締役(現任) 2021年3月 日本パリソン株式会社代表取締役会長(現任)	注4	483
取締役 常務執行役員 経営企画部長兼 財務部長 内部統制担当 グループ連携担当 未来挑戦部管掌	畔柳 博史	1960年8月5日	1984年4月 株式会社富士銀行入行 2012年6月 当社入社 2012年6月 執行役員経営企画部長 2013年6月 取締役兼執行役員経営企画部長 2014年6月 取締役兼執行役員管理本部長兼経営企画部長兼内部統制担当 2018年3月 取締役兼執行役員財務部長兼経営企画部長 内部統制担当 グループ連携担当 2018年6月 取締役兼常務執行役員財務部長兼経営企画部長 内部統制担当 グループ連携担当 2019年3月 遠東石塚グリーンペット株式会社 代表取締役 2019年6月 日本パリソン株式会社代表取締役会長 2020年3月 取締役常務執行役員経営企画部長兼財務部長 内部統制担当 グループ連携担当 人事・総務部管掌 2023年5月 取締役常務執行役員経営企画部長兼財務部長 内部統制担当 グループ連携担当 人事・総務部管掌 未来挑戦部管掌 2023年6月 取締役常務執行役員経営企画部長兼財務部長 内部統制担当 グループ連携担当 未来挑戦部管掌(現任)	注4	78
取締役 執行役員 ハウスウェアカンパニー社長	北山 聡	1958年10月20日	1981年3月 当社入社 2007年8月 ガラスびんカンパニー業務部長 2012年6月 執行役員管理本部財務部長 2018年3月 執行役員ハウスウェアカンパニー社長 2018年6月 取締役執行役員ハウスウェアカンパニー社長(現任)	注4	65
取締役 執行役員 新事業・機能材料カンパニー 社長	下宮 尚己	1958年3月11日	1980年4月 三井物産株式会社入社 2009年10月 当社入社 2013年6月 執行役員プラスチックカンパニー社長 2018年3月 執行役員アドバンストガラスカンパニー社長兼新事業創出カンパニー社長 2018年6月 取締役兼執行役員アドバンストガラスカンパニー社長兼新事業創出カンパニー社長 2019年5月 取締役兼執行役員アドバンストガラスカンパニー社長兼新事業創出カンパニー社長 非容器事業担当 2020年3月 取締役執行役員新事業・機能材料カンパニー社長兼イノベーション推進部長 非容器事業担当 2022年3月 取締役執行役員新事業・機能材料カンパニー社長兼イノベーション推進部長 2022年9月 取締役執行役員新事業・機能材料カンパニー社長(現任)	注4	61
取締役	後藤 武夫	1945年4月10日	1972年3月 弁護士登録 1979年4月 後藤武夫法律事務所 開設 同 所長 2006年6月 監査役 2014年6月 取締役(現任) 2023年1月 弁護士法人後藤・鈴木法律事務所 設立 同 代表社員 弁護士(現任)	注4	38

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (百株)
取締役	安北 千差	1972年 3月31日	2005年 4月 0.1.L.design設立 同 代表(現任) 2018年 6月 取締役(現任)	注 4	11
常勤監査役	大橋 茂夫	1954年 9月18日	1981年 3月 当社入社 2004年 3月 テクニカルカンパニー技術開発部長 2009年 3月 執行役員テクニカルカンパニー社長兼研 究開発センター所長 2011年 6月 取締役執行役員技術本部長兼アドバンス トガラスカンパニー社長 2018年 6月 監査役(現任)	注 5	86
監査役	加藤 茂	1948年10月21日	1978年 4月 弁護士登録 1981年 4月 加藤茂法律事務所開設 2014年 1月 監査役(現任)	注 6	20
監査役	小栗 悟	1962年 3月21日	1987年 4月 監査法人丸の内会計事務所(現有限責任 監査法人トーマツ)入所 1989年 1月 税理士登録 1992年12月 小栗悟税理士事務所開設 2011年 9月 税理士法人オグリに組織変更 代表社員 2014年 6月 監査役(現任) 2021年12月 税理士法人STRに社名変更 代表社員 (現任)	注 7	17
計					859

- (注) 1. 取締役後藤武夫、安北千差は、社外取締役であります。
2. 監査役加藤茂、小栗悟は、社外監査役であります。
3. 当社は、法令に定める監査役の数に欠けることになる場合に備え、監査役加藤茂、小栗悟の補欠監査役として松田茂樹を、常勤監査役大橋茂夫の補欠監査役として石原浩を選任しております。なお、補欠監査役松田茂樹は、「社外監査役」の要件を満たしております。
補欠監査役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (百株)
松田 茂樹	1961年 5月21日	1986年10月 監査法人丸の内会計事務所 (現有限責任監査法人トーマツ)入所 1994年 1月 松田公認会計士事務所開設(現任) 2004年 1月 税理士法人あいき設立 代表社員就任(現任) 2012年 4月 国立大学法人名古屋工業大学 監事 2013年 4月 株式会社F U J I 非常勤監査役 (現任) 2015年 4月 ローランドディー.ジー.株式会社 非常勤監査役 2023年 6月 補欠監査役(現任)	-
石原 浩	1956年 3月10日	1978年 4月 株式会社富士銀行入行 2008年 4月 当社入社 2011年 6月 人事総務部付部長 2016年 3月 当社退社 2016年 3月 ウイストン株式会社取締役営業部長兼 総務部長 2019年 6月 ウイストン株式会社取締役総務部長 2023年 6月 補欠監査役(現任)	20

- 補欠監査役の任期は、就任した時から退任した監査役の任期満了の時までであります。
4. 2023年 6月16日開催の定時株主総会の終結の時から 1年間
5. 2020年 6月16日開催の定時株主総会の終結の時から 4年間
6. 2021年 6月16日開催の定時株主総会の終結の時から 4年間
7. 2022年 6月17日開催の定時株主総会の終結の時から 4年間
8. 当社では、意思決定・監督と執行の分離による取締役会の活性化のため、執行役員制度を導入しており、取締役を兼務しない執行役員は次の16名であり、役名、職名及び氏名は以下のとおりであります。

役名	職名	氏名
上席執行役員	石塚マシンテクノ株式会社社長	森 隆弘
執行役員	ウイストン株式会社社長	杉浦 修
執行役員	アデリア株式会社社長	町野 晃透
執行役員	石塚王子ペーパーパッケージング株式会社社長	田村 亮一
執行役員	石塚王子ペーパーパッケージング株式会社生産本部長	松田 美樹

役名	職名	氏名
----	----	----

執行役員	プラスチックカンパニー社長兼日本パリソン株式会社社長	稲本 弘希
執行役員	環境部長兼岩倉統括工場長兼エンジニアリング・ソリューション部管掌 脱炭素推進担当	山内 毅
執行役員	石塚物流サービス株式会社社長	伊藤 雅郎
執行役員	ガラスびんカンパニー社長	平安 啓治
執行役員	ガラスびんカンパニー生産本部長	古々本 一夫
執行役員	ガラスびんカンパニー営業本部長兼東京支店長	鷲尾 祐司
執行役員	プラスチックカンパニー営業部長兼日本パリソン株式会社取締役営業部長	柴田 浩治
執行役員	ハウスウェアカンパニー市販部長兼北洋硝子株式会社代表取締役社長兼アデリア株式会社取締役営業本部長	壁屋 知則
執行役員	人事・総務部長	鹿間 芳則
執行役員	ガラスびんカンパニー業務部長兼石硝運輸株式会社代表取締役社長	山下 登
執行役員	石塚王子ペーパーパッケージング株式会社取締役営業本部長	鈴木 伸吾

社外取締役及び社外監査役の状況

当社は、社外監査役を2名選任しており、取締役会、その他の重要な会議への出席、重要書類の閲覧及び取締役との定期協議により、会社の基本方針、経営計画、重要事項の決定及び業務の執行状況の監査機能を十分発揮できる体制を整えております。

また、社外取締役を2名選任しており、取締役会の監督機能を強化するとともに、意思決定の透明性を確保する体制を整えております。

当社は、社外取締役及び社外監査役を選任するための独立性に関する基準又は方針として明確に定めたものではありませんが、その選任に際しては、経歴や当社との関係を踏まえて、当社経営陣から独立した立場で社外役員としての職務を遂行できる十分な独立性が確保できることを個別に判断しております。

(社外取締役)

- ・社外取締役後藤武夫は弁護士としての専門的見地から企業法務に関して高い見識を有しており、また当社の経営陣から独立した客観的立場から当社の経営に適切な指導や監督等を行うことが可能であり、社外取締役に選任しております。
- ・社外取締役安北千差は生活雑貨流通業界においてデザイナーとして豊富な経験と知識を有しており、また当社の経営陣から独立した客観的立場から当社の経営に適切な指導や監督等を行うことが可能であり、社外取締役に選任しております。

(社外監査役)

- ・社外監査役加藤茂は弁護士としての専門的見地から企業法務に関して高い見識を有しており、また当社の経営陣から独立した客観的立場から当社の経営に適切な指導や監査を行うことが可能であり、社外監査役に選任しております。
- ・社外監査役小栗悟は税理士としての専門的見地から税務・会計に関する高い見識を有しており、また当社の経営陣から独立した客観的立場から当社の経営に適切な指導や監査を行うことが可能であり、社外監査役に選任しております。

後藤武夫、安北千差、加藤茂、小栗悟の4名が保有している当社株式の保有は「役員の状況」の「所有株式数」欄に記載のとおりであり、人的関係又は取引関係その他利害関係はなく、社外役員として経営陣から独立した立場で職務を遂行しており、一般株主と利益相反が生じるおそれのない社外役員であると判断しております。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査人との相互連携並びに内部統制部門との関係

監査役監査と会計監査人との連携につきましては、会計監査の監査計画や経過報告を定期的に受けるほか、意見交換会を開催するなど会計監査の相当性確保に努めております。

また、内部監査部門との連携につきましては、内部監査部門の監査計画や監査結果の報告を定期的に受け、監査の参考としております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

当社は、監査役制度を採用しており、監査役3名(内、社外監査役2名)の構成となっており、監査役会を定期的に、また必要に応じて随時開催するほか、自らの監査方針及び監査計画に基づき定期的・網羅的に各社内カンパニー・部門及びグループ会社の監査を実施するとともに取締役会・カンパニー社長会等の重要会議に出席し、職務の執行状況を監視できる体制としております。

監査役会においては、監査報告の作成、監査方針及び監査計画の策定、会計監査人に関する評価、業務及び財産の状況の調査の方法、その他監査役の職務の執行に関する事項の決定等を行っております。

常勤監査役は取締役会等の重要会議の出席のほか、稟議書等の決裁書類や業務報告等で取締役等の業務執行状況を確認し、営業拠点及び工場等の監査をするとともに、会計監査人と適宜意見交換を行っております。ま

た、その結果を社外監査役と情報の共有及び協議を行い、社外監査役は経営全般に関する客観的で公正な意見の提言・勧告等を行い、社外で得られる重要な情報等の提供を図ることにより、監査の効率性を担保しています。

また、当事業年度において当社は監査役会を7回開催しており、個々の監査役の出席状況については次のとおりであります。なお、小栗悟は税理士として、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

氏名	開催回数	出席回数
大橋 茂夫	7回	7回
加藤 茂	7回	7回
小栗 悟	7回	6回

内部監査の状況

当社の内部監査部門は6名（常勤6名）の構成で、事業活動の全般にわたる管理・運営制度及び業務の遂行状況の合法性、合理性について監査し、その結果を取締役会及び監査役会に報告するとともに会計監査人と連携し、業務改善へ助言・提案を行っております。

会計監査の状況

(イ)監査法人の名称

有限責任監査法人トーマツ

(ロ)継続監査期間

1976年以降

なお、1975年以前の調査が著しく困難であったため、継続監査期間がその期間を超える可能性があります。

(ハ)業務を執行した公認会計士

浅井明紀子、牧野秀俊

(ニ)監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士11名、会計士試験合格者9名、その他20名であります。

(ホ)監査法人の選定方針と理由

当社は監査法人の選定にあたり、その品質管理体制、独立性及び妥当な実施体制の実現性等を選定方針の要件としております。監査役会は、会計監査人の職務の執行に支障がある場合等、その必要があると判断した場合には、株主総会に提出する会計監査人の解任又は不再任に関する議案の内容を決定いたします。また、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合には、監査役全員の同意に基づき、会計監査人を解任いたします。

(ヘ)監査役及び監査役会による監査法人の評価

有限責任監査法人トーマツの再任にあたり、日本監査役協会の「会計監査人の評価及び選定基準策定に関する監査役等の実務指針」に基づき、監査チームの独立性、当社グループ事業についての理解度、監査報酬の妥当性等を評価しております。

監査報酬の内容等

(イ)監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	42	5	42	5
連結子会社	24	-	25	-
計	66	5	67	5

当社における非監査業務の内容は、有限責任監査法人トーマツに対する「収益認識に関する会計基準の適用準備に関する助言・指導業務」についての対価であります。

(ロ)監査公認会計士等と同一のネットワークに対する報酬(イを除く)

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	-	2	-	1
連結子会社	-	-	-	-
計	-	2	-	1

(注)非監査業務の内容は、デロイトトーマツ税理士法人による税務に関するアドバイザリー業務等でありませ

す。
(ハ)その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

(二)監査報酬の決定方針

方針としては定めておりませんが、当社の監査公認会計士等に対する監査報酬は、監査日数、当社の規模・業務の特性等の要素を勘案し、監査役会の同意のもと適切に決定しております。

(ホ)監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当社監査役会は、日本監査役協会が公表する「会計監査人との連携に関する実務指針」を踏まえ、前事業年度の監査実績の分析・評価を行い、当事業年度の監査契約及び報酬額の妥当性の検討をした結果、会計監査人の報酬等につき、会社法第399条第1項の同意を行っております。

(4)【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針の内容及び決定方法

役員報酬については、取締役会でその構成が決定されるコーポレートガバナンス委員会において、個人別報酬額算定方法及び報酬構成の原案を決定することとしております。

(取締役報酬)

取締役会の決議により取締役の個人別の報酬等の内容に係る決定方針(以下、決定方針という。)を定めており、取締役の月額報酬は、役位、職責、当社の業績、従業員の給与の水準を考慮しながら、総合的に勘案して決定する「固定報酬」と、月額報酬の一部を役員持株会を通じて市場から自己株式を取得する方法である「株価連動型報酬」としております。業績連動報酬は、当社中期経営計画の基本方針として目標値に掲げている連結営業利益率を指標とし、賞与として支給することがあるとしております。取締役の個人別報酬額算定方法の原案の決定は、コーポレートガバナンス委員会により決定し、その原案をもとに取締役会において委任された代表取締役社長執行役員石塚久継が報酬額を決定しております。

個人別報酬額について取締役会決議にもとづき代表取締役社長執行役員石塚久継がその具体的内容について委任を受けるものとし、その権限の内容は、各取締役の月額報酬の額および各取締役の担当事業の業績を踏まえた賞与の評価分配とすることとしております。これらの権限を委任した理由は、当社全体の業績を俯瞰しつつ各取締役の担当事業の評価を行うには代表取締役が最も適しているからであります。そのため、取締役会はその内容が決定方針に沿うものであると判断しております。また、コーポレートガバナンス委員会で決定された個人別報酬額算定方法の原案にもとづいて代表取締役社長執行役員石塚久継が個人別の報酬を決定していることから、恣意的な決定がなされず権限が適切に行使されるための措置が講じられております。

なお、取締役の報酬については、2007年6月15日開催の第72回定時株主総会において、年額220百万円以内と決議をいただいております。また、当時の取締役の員数は5名であります。

(監査役報酬)

監査役報酬は、上述のコーポレートガバナンス委員会において決定した原案に基づき、監査役会で決定いたします。

なお、監査役の報酬については、2007年6月15日開催の第72回定時株主総会において、年額60百万円と決議をいただいております。また、当時の監査役の員数は4名であります。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額(百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)			対象となる役員の員数(名)
		基本報酬	業績連動報酬等	非金銭報酬等	
取締役 (社外取締役を除く。)	78	78	-	-	4
監査役 (社外監査役を除く。)	15	15	-	-	1
社外役員	22	22	-	-	4

(5)【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

投資株式の区分については、もっぱら株式の価値の変動又は株式に係る配当によって利益を受けることを目的とする場合を純投資目的である投資株式とし、それ以外を純投資目的以外の目的である投資株式としております。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

(イ) 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、お客様や取引先の株式を保有することで中長期的な関係維持、取引拡大が可能となり、結果として当社の企業価値を高め、株主・投資家の皆様の利益につながると考える場合において、その株式を保有する方針としております。

個別の保有株式の合理性について、毎年、取締役会において、取引関係の維持発展、当社企業価値向上への寄与度、投資効率等を勘案して判断しております。保有を継続する合理性が希薄となった銘柄については、縮減を検討します。

2023年3月31日の取締役会での検証の結果、保有するすべての政策保有株式について、保有を継続することといたしました。

(ロ) 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	14	382
非上場株式以外の株式	30	4,025

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得価 額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	-	-	-
非上場株式以外の株式	4	11	取引先持株会による定期買付

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却価 額の合計額(百万円)
非上場株式	-	-
非上場株式以外の株式	-	-

(ハ) 特定投資株式の銘柄ごとの株式数及び貸借対照表計上額等に関する情報

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果及び株式数 が増加した理由(注2)	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
カゴメ(株)	274,194	272,958	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。 (注3)	有
	823	855		
明治ホールディングス(株)	122,468	122,468	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。 (注4)	無
	776	826		
宝ホールディングス(株)	454,181	453,617	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。 (注3)	有
	461	514		
(株)みずほフィナンシャルグループ	181,835	181,835	取引金融機関との関係円滑化のため、保有しております。 (注4)	無
	331	291		
愛知時計電機(株)	213,900	213,900	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。	有
	311	334		
新東工業(株)	247,071	247,071	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。	有
	193	172		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果及び株式数が増加した理由(注2)	当社の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	212,260	212,260	取引金融機関との関係円滑化のため、保有しております。 (注4)	無
	175	161		
(株)あいちフィナンシャルグループ	53,652	-	取引金融機関との関係円滑化のため、保有しております。 (注4,5)	無
	113	-		
AGC(株)	21,178	21,178	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。 (注4)	無
	100	102		
(株)三井住友フィナンシャルグループ	15,859	15,859	取引金融機関との関係円滑化のため、保有しております。 (注4)	無
	81	64		
(株)フジインコーポレーテッド	11,500	11,500	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。	有
	73	79		
(株)パイロットコーポレーション	18,600	18,600	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。 (注4)	無
	73	97		
サッポロホールディングス(株)	21,430	21,430	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。	無
	71	49		
東洋紡(株)	70,000	70,000	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。	無
	70	76		
コカ・コーラ ボトラーズ ジャパンホールディングス(株)	42,405	38,274	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。 (注3)	無
	57	54		
SOMPOホールディングス(株)	10,000	10,000	取引金融機関との関係円滑化のため、保有しております。 (注4)	無
	52	54		
(株)TYK	155,000	155,000	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。	有
	48	45		
(株)滋賀銀行	16,160	16,160	取引金融機関との関係円滑化のため、保有しております。	有
	42	37		
アイホン(株)	12,700	12,700	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。	有
	25	26		
大同メタル工業(株)	45,000	45,000	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。	有
	22	26		
キューピー(株)	9,180	9,180	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。	無
	20	22		
東邦瓦斯(株)	7,400	7,400	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。	有
	18	20		
(株)御園座	8,000	8,000	地域経済発展への協力のため保有しております。	無
	14	16		
(株)大垣共立銀行	7,427	7,427	取引金融機関との関係円滑化のため、保有しております。	有
	13	14		
アルテック(株)	50,000	50,000	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。	有
	13	13		
ブルドックソース(株)	6,348	6,348	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。	無
	11	13		
第一生命ホールディングス(株)	4,100	4,100	取引金融機関との関係円滑化のため、保有しております。 (注4)	無
	9	10		
ダイナパック(株)	5,929	5,929	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。	有
	7	7		
雪印メグミルク(株)	2,700	2,301	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。 (注3)	無
	4	4		
キリンホールディングス(株)	806	806	中長期的な取引の維持・発展、企業価値向上のため保有しております。	無
	1	1		
(株)愛知銀行	-	14,400	取引金融機関との関係円滑化のため、保有しております。 (注5)	有
	-	69		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果及び株式数が増加した理由(注2)	当社の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)中京銀行	-	5,700	取引金融機関との関係円滑化のため、保有しております。 (注5)	有
	-	9		

- (注) 1. 当社保有の特定投資株式は、60銘柄に満たないことから、貸借対照表計上額が資本金額の100分の1以下である特定投資株式についても記載しております。
2. 各銘柄の定量的な保有効果等の記載については困難であるため記載しておりません。
3. 取引先持株会の定期買付により株式数が増加しております。
4. 保有先企業は当社の株式を保有していませんが、同社子会社が当社の株式を保有しています。
5. (株)愛知銀行及び(株)中京銀行は、共同株式移転の方法により両社の完全親会社となる(株)あいちフィナンシャルグループを設立しております。当事業年度は株式移転後の株式数及び貸借対照表計上額、前事業年度は株式移転前の株式数及び貸借対照表計上額を記載しております。

保有目的が純投資目的である投資株式
 該当事項はありません。

第5 【経理の状況】

1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下、「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成していません。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2022年3月21日から2023年3月20日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2022年3月21日から2023年3月20日まで)の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツにより監査を受けております。

3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、またその変更に対応できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、当該法人の行うセミナー等に参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	4,138	5,074
受取手形及び売掛金	15,071	15,767
有価証券	1,200	1,000
商品及び製品	13,464	10,517
仕掛品	857	775
原材料及び貯蔵品	4,694	4,131
有償受給に係る資産	-	3,136
その他	1,222	2,463
貸倒引当金	2	4
流動資産合計	40,646	42,862
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	3 26,773	3 26,891
減価償却累計額	20,093	20,718
建物及び構築物（純額）	3 6,679	3 6,173
機械装置及び運搬具	3 44,398	3 43,665
減価償却累計額	40,243	39,647
機械装置及び運搬具（純額）	3 4,154	3 4,017
工具、器具及び備品	3 7,216	3 6,712
減価償却累計額	6,321	5,795
工具、器具及び備品（純額）	3 894	3 917
土地	3, 4 16,748	3, 4 16,745
リース資産	8,710	7,334
減価償却累計額	4,694	3,877
リース資産（純額）	4,015	3,456
建設仮勘定	182	4,113
有形固定資産合計	32,675	35,423
無形固定資産		
ソフトウェア	117	90
その他	30	31
無形固定資産合計	147	121
投資その他の資産		
投資有価証券	1, 3 6,922	1, 3 6,801
繰延税金資産	1,021	925
その他	496	258
貸倒引当金	18	17
投資その他の資産合計	8,422	7,968
固定資産合計	41,246	43,514
繰延資産		
社債発行費	204	159
繰延資産合計	204	159
資産合計	82,097	86,536

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	9,353	9,782
短期借入金	3 8,557	3 4,166
1年内償還予定の社債	647	539
リース債務	1,531	1,255
未払金	3 1,420	3 2,516
未払費用	2,569	2,375
未払法人税等	785	293
賞与引当金	633	620
その他	1,061	1,316
流動負債合計	26,560	22,866
固定負債		
社債	8,618	8,078
長期借入金	3 2,821	3 13,660
リース債務	2,680	1,925
長期未払金	3 1,445	3 1,188
繰延税金負債	1,012	985
再評価に係る繰延税金負債	4 3,399	4 3,399
役員退職慰労引当金	78	81
汚染負荷量引当金	423	402
退職給付に係る負債	5,519	5,120
その他	675	79
固定負債合計	26,673	34,920
負債合計	53,233	57,787
純資産の部		
株主資本		
資本金	6,344	6,344
資本剰余金	4,606	4,606
利益剰余金	6,663	6,719
自己株式	85	86
株主資本合計	17,528	17,584
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	2,286	2,241
繰延ヘッジ損益	18	7
土地再評価差額金	4 5,393	4 5,393
為替換算調整勘定	19	94
退職給付に係る調整累計額	39	27
その他の包括利益累計額合計	7,719	7,520
非支配株主持分	3,616	3,644
純資産合計	28,863	28,749
負債純資産合計	82,097	86,536

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 3月21日 至 2022年 3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年 3月21日 至 2023年 3月20日)
売上高	69,384	56,749
売上原価	1, 3 55,954	1, 3 43,666
売上総利益	13,430	13,082
販売費及び一般管理費	2, 3 10,817	2, 3 10,871
営業利益	2,612	2,210
営業外収益		
受取利息	3	2
受取配当金	177	231
為替差益	179	283
受取賃貸料	249	239
雇用調整助成金	78	-
その他	71	118
営業外収益合計	758	875
営業外費用		
支払利息	243	261
社債発行費償却	48	44
賃貸収入原価	121	157
その他	165	305
営業外費用合計	579	769
経常利益	2,791	2,317
特別利益		
固定資産売却益	6 785	-
特別利益合計	785	-
特別損失		
事業撤退損	4 95	-
工場閉鎖関連損失	-	5 1,178
減損損失	4 73	4 113
特別損失合計	169	1,291
税金等調整前当期純利益	3,408	1,025
法人税、住民税及び事業税	1,012	516
法人税等調整額	190	179
法人税等合計	1,202	695
当期純利益	2,205	329
非支配株主に帰属する当期純利益又は非支配株主に 帰属する当期純損失()	48	77
親会社株主に帰属する当期純利益	2,254	252

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 3月21日 至 2022年 3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年 3月21日 至 2023年 3月20日)
当期純利益	2,205	329
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	83	66
繰延ヘッジ損益	6	16
為替換算調整勘定	32	75
退職給付に係る調整額	135	67
その他の包括利益合計	26	225
包括利益	2,232	104
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	2,180	53
非支配株主に係る包括利益	52	50

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	6,344	4,606	4,409	85	15,274
会計方針の変更による 累積的影響額					-
会計方針の変更を反映し た当期首残高	6,344	4,606	4,409	85	15,274
当期変動額					
剰余金の配当					-
親会社株主に帰属する 当期純利益			2,254		2,254
自己株式の取得				0	0
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)					
当期変動額合計	-	-	2,254	0	2,253
当期末残高	6,344	4,606	6,663	85	17,528

	その他の包括利益累計額						非支配株主 持分	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	為替換算調 整勘定	退職給付 に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	2,463	19	5,393	13	96	7,792	3,591	26,659
会計方針の変更による 累積的影響額								-
会計方針の変更を反映し た当期首残高	2,463	19	5,393	13	96	7,792	3,591	26,659
当期変動額								
剰余金の配当								-
親会社株主に帰属する 当期純利益								2,254
自己株式の取得								0
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)	176	1	-	32	135	73	24	49
当期変動額合計	176	1	-	32	135	73	24	2,204
当期末残高	2,286	18	5,393	19	39	7,719	3,616	28,863

当連結会計年度(自 2022年 3月21日 至 2023年 3月20日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	6,344	4,606	6,663	85	17,528
会計方針の変更による 累積的影響額			7		7
会計方針の変更を反映し た当期首残高	6,344	4,606	6,655	85	17,520
当期変動額					
剰余金の配当			188		188
親会社株主に帰属する 当期純利益			252		252
自己株式の取得				0	0
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	-	63	0	63
当期末残高	6,344	4,606	6,719	86	17,584

	その他の包括利益累計額						非支配株主 持分	純資産合計
	その他 有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ 損益	土地再評価 差額金	為替換算調 整勘定	退職給付 に係る 調整累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期首残高	2,286	18	5,393	19	39	7,719	3,616	28,863
会計方針の変更による 累積的影響額								7
会計方針の変更を反映し た当期首残高	2,286	18	5,393	19	39	7,719	3,616	28,856
当期変動額								
剰余金の配当								188
親会社株主に帰属する 当期純利益								252
自己株式の取得								0
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	45	10	-	75	67	198	28	170
当期変動額合計	45	10	-	75	67	198	28	106
当期末残高	2,241	7	5,393	94	27	7,520	3,644	28,749

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 3月21日 至 2022年 3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年 3月21日 至 2023年 3月20日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	3,408	1,025
減価償却費	3,696	3,254
貸倒引当金の増減額(は減少)	6	0
賞与引当金の増減額(は減少)	3	14
役員退職慰労引当金の増減額(は減少)	3	3
汚染負荷量引当金の増減額(は減少)	21	20
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	189	514
受取利息及び受取配当金	180	234
雇用調整助成金	78	-
為替差損益(は益)	180	331
支払利息	243	261
有形及び無形固定資産除却損	42	119
有形固定資産売却損益(は益)	786	14
減損損失	73	113
事業撤退損	95	-
工場閉鎖関連損失	-	1,178
売上債権の増減額(は増加)	1,436	679
棚卸資産の増減額(は増加)	1,277	550
未収入金の増減額(は増加)	53	746
前渡金の増減額(は増加)	31	87
仕入債務の増減額(は減少)	1,060	396
未払費用の増減額(は減少)	237	222
その他	437	34
小計	4,620	4,072
利息及び配当金の受取額	181	234
利息の支払額	247	242
工場閉鎖関連損失の支払額	-	632
雇用調整助成金の受取額	106	-
法人税等の支払額	567	1,344
営業活動によるキャッシュ・フロー	4,093	2,087
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の払戻による収入	-	9
有形固定資産の取得による支出	2,194	5,788
有形固定資産の売却による収入	1,801	24
投資有価証券の取得による支出	92	13
貸付けによる支出	11	4
貸付金の回収による収入	33	159
その他	85	19
投資活動によるキャッシュ・フロー	548	5,593

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 3月21日 至 2022年 3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年 3月21日 至 2023年 3月20日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の増減額（ は減少）	2,110	5,270
長期借入れによる収入	80	12,700
長期借入金の返済による支出	1,123	1,031
社債の償還による支出	885	647
セール・アンド・リースバックによる収入	385	349
リース債務の返済による支出	1,656	1,552
長期未払金の返済による支出	750	195
配当金の支払額	-	188
非支配株主への配当金の支払額	27	22
その他	0	0
財務活動によるキャッシュ・フロー	1,868	4,140
現金及び現金同等物に係る換算差額	50	109
現金及び現金同等物の増減額（ は減少）	1,727	744
現金及び現金同等物の期首残高	3,598	5,325
現金及び現金同等物の期末残高	5,325	6,069

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 15社

連結子会社の名称

アデリア(株)、石塚物流サービス(株)、ウイストン(株)、石硝運輸(株)、日本パリソン(株)、久金属工業(株)、北洋硝子(株)、鳴海製陶(株)、三重ナルミ(株)、PT. NARUMI INDONESIA、NARUMI SINGAPORE PTE LTD.、鳴海(上海)商貿有限公司、PT. NARUMI GLOBAL SUPPLY INDONESIA、大阪アデリア(株)、石塚王子ペーパーパッケージング(株)

(2) 非連結子会社の数 5社

非連結子会社の名称

石塚マシンテクノ(株)、ISHIZUKA GLASS (UK) LTD.、NARUMI TABLEWARE USA, INC.、ISHIZUKA GLASS (EUROPE) GmbH、石塚硝子分割準備(株)

(連結の範囲から除いた理由)

非連結子会社5社は、いずれも小規模会社であり、総資産、売上高、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等のそれぞれの合計額は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないため、連結の範囲から除いております。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法を適用した非連結子会社及び関連会社の数 なし

(2) 持分法を適用しない非連結子会社の数 5社

持分法を適用しない非連結子会社の名称

石塚マシンテクノ(株)、ISHIZUKA GLASS (UK) LTD.、NARUMI TABLEWARE USA, INC.、ISHIZUKA GLASS (EUROPE) GmbH、石塚硝子分割準備(株)

(持分法を適用していない理由)

持分法を適用していない非連結子会社5社は、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等のそれぞれの合計額が連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないため、持分法の適用から除いております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち、久金属工業(株)、北洋硝子(株)、鳴海製陶(株)、三重ナルミ(株)、PT. NARUMI INDONESIA、NARUMI SINGAPORE PTE LTD.、鳴海(上海)商貿有限公司及びPT. NARUMI GLOBAL SUPPLY INDONESIAの決算日は12月31日であります。また、大阪アデリア(株)の決算日は1月31日であります。

連結財務諸表の作成に当たっては、当該連結子会社の事業年度に係る財務諸表を使用しております。ただし、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

(イ) 有価証券

その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

市場価格のない株式等

主として移動平均法による原価法

(ロ) デリバティブ

時価法

(ハ) 棚卸資産

商品・製品・原材料・仕掛品

主として総平均法による原価法

(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

貯蔵品

受払記録のあるもの

主として総平均法による原価法

(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

その他のもの

主として最終仕入原価法による原価法

(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却方法

(イ)有形固定資産(リース資産を除く)

当社及び連結子会社15社のうち10社が定額法、6社が定率法であります。

ただし、国内会社は、1998年4月1日以降に取得した建物並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 2～60年

機械装置及び運搬具 2～15年

(ロ)無形固定資産(リース資産を除く)

定額法

ただし、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法を採用しております。

(ハ)リース資産

所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法を採用しております。

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとする定額法を採用しております。なお、所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が2009年3月20日以前のリース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。

(3) 繰延資産の処理方法

社債発行費

社債の償還までの期間にわたり定額法により償却しております。

(4) 重要な引当金の計上基準

(イ)貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(ロ)賞与引当金

従業員の賞与支給に備えるため、支給見込額のうち当連結会計年度に負担すべき額を計上しております。

(ハ)役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金支払に備えるため、連結子会社の一部は役員退職慰労金の内規に基づく連結会計年度末要支給額を計上しております。

(ニ)汚染負荷量引当金

当社が吸収合併した旧(株)アサヒビールパックスが過去に有していた吹田及び関東工場に係る汚染負荷量賦課金の支払に備えるため、将来にわたって発生する汚染負荷量賦課金総額の現在価値を汚染負荷量引当金として計上しております。

(5) 退職給付に係る会計処理の方法

(イ)退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。

(ロ)数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

数理計算上の差異は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10～15年)による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理することとしております。

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理することとしております。

(6) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社の資産及び負債は、在外子会社の決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めて計上しております。

(7) 重要なヘッジ会計の方法

(イ)ヘッジ会計の方法

原則として繰延ヘッジ処理によって行うこととしております。なお、為替予約及び通貨オプションについては、振当処理の要件を満たしている場合には振当処理を、特例処理の要件を満たしている金利スワップについては、特例処理を採用しております。

(ロ)ヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジ方針

変動金利支払の長期借入金について金利変動リスクをヘッジする目的で金利スワップを、また、商品及び原材料輸入等に伴う為替リスクをヘッジする目的で為替予約及び通貨オプションを利用しており、投機的な取引は行わない方針であります。

当連結会計年度にヘッジ会計を適用したヘッジ対象とヘッジ手段は以下のとおりであります。

ヘッジ手段...金利スワップ

ヘッジ対象...借入金

ヘッジ手段...為替予約

ヘッジ対象...商品及び原材料輸入等による買入債務及び予定取引

(ハ)有効性評価の方法

金利スワップ、為替予約及び通貨オプションについては、ヘッジ開始時から有効性判定時点までの期間において、ヘッジ対象とヘッジ手段の相場変動の累計を比較し、両者の変動額等を基礎にして判断しております。特例処理によっている金利スワップについては、有効性の評価は省略しております。

(8) 重要な収益及び費用の計上基準

当社及び連結子会社の顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点（収益を認識する通常の時点）は以下のとおりであります。

当社グループは、ガラスびん・ハウスウェア・紙容器・プラスチック容器・産業器材の製造及び販売、並びにこれらに関連した事業活動を展開しております。製品の製造・販売については、主に完成した製品を顧客に引き渡すことを履行義務として識別しております。したがって、製品を引き渡した時点で当該製品に対する支配が顧客に移転し履行義務が充足されると判断し、当該時点で収益を認識しております。なお、国内の販売については、出荷時から当該製品の支配が顧客に移転されるまでの期間が通常の期間である場合には、原則として出荷時に収益を認識しております。また、輸出取引については、インコタームズ等で定められた貿易条件に基づきリスク負担が顧客に移転した時点で収益を認識しております。

その他に、顧客から原材料等を仕入れ加工を行ったうえで当該顧客に販売する有償受給取引においては、顧客に支払われる対価に該当するものと判断し、原材料等の仕入価格を除いた対価の純額で収益を認識しております。また、販売手数料等の顧客に支払われる対価については、売上高から控除した金額で収益を認識しております。

なお、これらの履行義務に対する対価は、履行義務を充足してから1年以内に受領しており、重要な金融要素は含まれておりません。

(9) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(重要な会計上の見積り)

前連結会計年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)

(石塚硝子(株)のガラスびん事業及びガラス食器事業の固定資産の減損損失の認識の要否)

(1) 当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額

当連結会計年度において、石塚硝子(株)のガラスびん事業の資産グループ(帳簿価額3,785百万円)及び石塚硝子(株)のガラス食器事業の資産グループ(帳簿価額2,238百万円)について減損の兆候が認められたことから、減損損失の計上の要否について検討を行いました。検討の結果、割引前将来キャッシュ・フローが各資産グループの帳簿価額を上回っていることから、減損損失は認識しておりません。

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額の算出方法

当社グループは事業用資産について、主として事業単位でグルーピングを行っております。収益性の低下や著しい経営環境の悪化等により減損の兆候がある資産グループがある場合には、当該資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フローの総額が帳簿価額を下回った場合、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として認識します。

当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額の算出に用いた主要な仮定

減損の兆候がある資産グループから得られる将来キャッシュ・フローの見積りにあたっては、翌年度事業計画等を基礎としており、その主要な仮定はエネルギー価格とこれを反映した売上単価であります。

翌連結会計年度に係る連結財務諸表に与える影響

見積りの主要な仮定は、連結財務諸表作成時点において入手可能な外部データや過去からの実績の長期趨勢

に基づいており、地政学的問題に伴うエネルギー価格の動向の予測が難しく、不確実性を伴うものであるため、割引前将来キャッシュ・フローの見積り額の前提とした条件や仮定に変更が生じた場合には、翌連結会計年度の連結財務諸表に影響を及ぼす可能性があります。

当連結会計年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)

(ガラスびん事業、ガラス食器事業並びに紙容器関連事業の固定資産の減損損失の認識の要否)

(1) 当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額

当連結会計年度において、石塚硝子(株)のガラスびん事業の資産グループ(帳簿価額3,483百万円)及び石塚硝子(株)のガラス食器事業の資産グループ(帳簿価額2,524百万円)並びに石塚王子ペーパーパッケージング(株)の紙容器関連事業の資産グループ(帳簿価額1,033百万円)について減損の兆候が認められたことから、減損損失の計上の要否について検討を行いました。検討の結果、割引前将来キャッシュ・フローが各資産グループの帳簿価額を上回っていることから、減損損失は認識しておりません。

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額の算出方法

当社グループは事業用資産について、主として事業単位でグルーピングを行っております。収益性の低下や著しい経営環境の悪化等により減損の兆候がある資産グループがある場合には、当該資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フローの総額が帳簿価額を下回った場合、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として認識します。

当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額の算出に用いた主要な仮定

減損の兆候がある資産グループから得られる将来キャッシュ・フローの見積りにあたっては、翌年度事業計画等を基礎としており、その主要な仮定はエネルギー価格とこれを反映した売上単価であります。

翌連結会計年度に係る連結財務諸表に与える影響

見積りの主要な仮定は、連結財務諸表作成時点において入手可能な外部データや過去からの実績の長期趨勢に基づいており、地政学的問題を発端とするエネルギー価格の動向を予測することは難しく不確実性を伴うものであるため、割引前将来キャッシュ・フローの見積り額の前提とした条件や仮定に変更が生じた場合には、翌連結会計年度の連結財務諸表に影響を及ぼす可能性があります。

(会計方針の変更)

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当連結会計年度の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することとしております。

収益認識会計基準等の適用による主な変更点は以下の通りです。

(1) 顧客に支払われる対価

販売手数料等の顧客に支払われる対価について、従来は主に販売費及び一般管理費に計上しておりましたが、売上高から控除する方法に変更しております。また、顧客から原材料等を仕入れ、加工を行ったうえで当該顧客に販売する有償受給取引において、従来は仕入価格を含めた対価の総額で収益を認識しておりましたが、原材料等の仕入価格を除いた対価の純額で収益を認識する方法に変更しております。

(2) 輸出取引

出荷時に収益を認識していた輸出版売の一部において、インコタームズ等で定められた貿易条件に基づきリスク負担が顧客に移転した時点で収益を認識する方法に変更しております。

(3) 消化卸型販売取引

百貨店等における消化卸型販売取引について、従来は顧客から受け取る額から販売店の手数料相当額を控除した純額で収益を認識しておりましたが、当該取引における役割が本人に該当することから、総額で収益を認識する方法に変更しております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、当連結会計年度の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当連結会計年度の期首の利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。

この結果、当連結会計年度の売上高が19,151百万円、売上原価が19,178百万円並びに営業外費用が11百万円減少し、販売費及び一般管理費が30百万円増加しました。したがって、営業利益が3百万円減少し、経常利益及び税金等調整前当期純利益がそれぞれ8百万円増加しております。また、利益剰余金の当期首残高は7百万円減少しております。なお、収益認識会計基準第89-3項に定める経過的な取扱いに従って、前連結会計年度に係る「収益認識関係」注記については記載しておりません。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」（企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。）等を当連結会計年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」（企業会計基準第10号 2019年7月4日）第44 - 2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することといたしました。なお、連結財務諸表に与える影響はありません。

また、「金融商品関係」注記において、金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項等の注記を行うことといたしました。ただし、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第19号 2019年7月4日）第7 - 4項に定める経過的な取扱いに従って、当該注記のうち前連結会計年度に係るものについては記載しておりません。

(連結貸借対照表関係)

1 非連結子会社及び関連会社に対するものは次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
投資有価証券(株式)	227百万円	227百万円

2 偶発債務

債権流動化に伴う買戻上限額

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
債権流動化に伴う買戻上限額	583百万円	589百万円

連結会社以外の関係会社の金融機関からの借入金等に対する債務保証

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
石塚マシントテクノ株式会社	- 百万円	10百万円

3 担保に供している資産及び担保に係る債務

(1) 担保提供資産

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
建物及び構築物	1,987百万円	1,836百万円
機械装置及び運搬具	1,701	1,546
工具、器具及び備品	443	530
土地	8,409	8,409
投資有価証券	2,031	1,901
計	14,573	14,222

上記のうち工場財団抵当に供している資産

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
建物及び構築物	1,953百万円	1,804百万円
機械装置及び運搬具	1,701	1,546
工具、器具及び備品	443	530
土地	8,164	8,164
計	12,262	12,045

(2) 担保資産に対応する債務

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
短期借入金	310百万円	310百万円
長期借入金 (1年内返済予定額を含む)	11	95
未払金	195	195
長期未払金	1,174	978
計	1,691	1,580

上記のうち工場財団抵当に対応する債務

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
短期借入金	300百万円	300百万円

4 土地の再評価に関する事項

当社及び鳴海製陶株式会社は「土地再評価に関する法律」(平成10年3月31日公布法律第34号)及び平成13年3月31日の同法律の改正に基づき、事業用土地の再評価を行っております。なお、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

・再評価の方法

当社

「土地の再評価に関する法律施行令」(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第3号に定める固定資産税評価額に合理的な調整を行って算出しております。

鳴海製陶株式会社

同条第4号に定める地価税法(平成3年法律第69号)第16条に規定する地価税の課税価格の計算の基礎となる土地の価額を算定するために国税庁長官が定めて公表した方法により算定した価額に合理的な調整を行って算出しております。

・再評価を行った日 当社 2002年3月20日
鳴海製陶株式会社 2002年3月31日

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
再評価を行った土地の期末における時価と再評価後の帳簿価額との差額	1,968百万円	1,969百万円

(連結損益計算書関係)

- 1 期末棚卸高は収益性の低下に伴う簿価切下後の金額であり、次の簿価切下額(前期に計上した簿価切下額を戻し入れた当該戻入額相殺後の額)が売上原価に含まれております。

	前連結会計年度 (自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
	93百万円	28百万円

2 販売費及び一般管理費の主要な費目及び金額

	前連結会計年度 (自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
運賃	3,201百万円	3,274百万円
従業員給与及び賞与	2,407	2,526
賞与引当金繰入額	159	171
退職給付費用	143	125
役員退職慰労引当金繰入額	3	3
減価償却費	265	232
貸倒引当金繰入額	0	0

3 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費

前連結会計年度 (自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
761百万円	743百万円

4 減損損失

前連結会計年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)

当連結会計年度において、当社グループは以下の資産グループについて固定資産に関する特別損失を計上しました。

用途	場所	種類	金額(百万円)
紙容器生産設備 (処分予定資産)	兵庫県神崎郡福崎町	機械装置及び運搬具	25
プラスチック容器生産設備 (処分予定資産)	関東地方	機械装置及び運搬具	78
事務所	東京都他	建物及び構築物等	47

当社グループは事業用資産について、主として事業単位でグルーピングを行っております。また、処分が決定された資産については個々の資産ごとに減損の要否を判定しています。

紙容器関連事業の生産ラインの一部について停止及び処分の意思決定を行ったため、固定資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

プラスチック容器関連事業の一部について事業終了の意思決定を行ったため、固定資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を事業撤退損として特別損失に計上しております。

また、上記とは別に一部の連結子会社の営業事務所を移転したことなどに伴い、固定資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。その内訳は建物及び構築物37百万円、その他10百万円であります。

回収可能価額は正味売却価額により測定しており、正味売却価額は主に処分見込額により算定しております。

当連結会計年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)

当連結会計年度において、当社グループは以下の資産グループについて固定資産に関する特別損失を計上しました。

用途	場所	種類	金額(百万円)
ガラス食器生産設備 (処分予定資産)	愛知県岩倉市	機械装置及び運搬具等	96
事務所	大阪府	建物及び構築物	17

当社グループは事業用資産について、主として事業単位でグルーピングを行っております。また、処分が決定された資産については個々の資産ごとに減損の要否を判定しています。

ガラス食器事業の生産ラインの一部について停止の意思決定を行い遊休状態になる見込みであることから、固定資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。その内訳は機械装置81百万円、その他14百万円であります。

回収可能価額は正味売却価額により測定しており、正味売却価額は主に処分見込額により算定しております。

また、上記とは別に一部の連結子会社の営業事務所を移転したことなどに伴い、固定資産の帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

5 工場閉鎖関連損失

前連結会計年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)

ガラスびん事業の生産拠点である姫路工場の生産停止に伴い、工場閉鎖関連損失1,178百万円を計上しております。主な内訳は、従業員退職関連費用491百万円、土壌改良費用376百万円、減損損失50百万円、その他260百万円です。

6 固定資産売却益の内訳

	前連結会計年度 (自 2021年 3月21日 至 2022年 3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年 3月21日 至 2023年 3月20日)
建物及び構築物、土地	785百万円	- 百万円

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2021年 3月21日 至 2022年 3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年 3月21日 至 2023年 3月20日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	93百万円	133百万円
組替調整額	-	-
税効果調整前	93	133
税効果額	10	66
その他有価証券評価差額金	83	66
繰延ヘッジ損益		
当期発生額	10	23
組替調整額	-	-
税効果調整前	10	23
税効果額	4	7
繰延ヘッジ損益	6	16
為替換算調整勘定		
当期発生額	32	75
組替調整額	-	-
為替換算調整勘定	32	75
退職給付に係る調整額		
当期発生額	148	135
組替調整額	52	48
税効果調整前	201	86
税効果額	65	19
退職給付に係る調整額	135	67
その他の包括利益合計	26	225

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2021年 3月21日 至 2022年 3月20日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数(千株)	当連結会計年度 増加株式数(千株)	当連結会計年度 減少株式数(千株)	当連結会計年度末 株式数(千株)
発行済株式				
普通株式	4,219	-	-	4,219
合計	4,219	-	-	4,219
自己株式				
普通株式(注)	33	0	-	33
合計	33	0	-	33

(注) 普通株式の自己株式の株式数の増加0千株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

該当事項はありません。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2022年4月25日 取締役会	普通株式	利益剰余金	188	45円	2022年3月20日	2022年6月1日

当連結会計年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数(千株)	当連結会計年度 増加株式数(千株)	当連結会計年度 減少株式数(千株)	当連結会計年度末 株式数(千株)
発行済株式				
普通株式	4,219	-	-	4,219
合計	4,219	-	-	4,219
自己株式				
普通株式(注)	33	0	-	33
合計	33	0	-	33

(注) 普通株式の自己株式の株式数の増加0千株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2022年4月25日 取締役会	普通株式	利益剰余金	188	45円	2022年3月20日	2022年6月1日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2023年4月26日 取締役会	普通株式	利益剰余金	146	35円	2023年3月20日	2023年5月31日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
現金及び預金勘定	4,138百万円	5,074百万円
有価証券勘定	1,200	1,000
預入期間が3ヶ月を超える 定期預金	13	4
現金及び現金同等物	5,325	6,069

(リース取引関係)

(借主側)

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

有形固定資産

主として、紙容器関連における生産設備(「建物附属設備、機械装置及び運搬具」)及びガラスびん関連における生産設備(「機械装置及び運搬具」)であります。

リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項 (2)重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

有形固定資産

主として、プラスチック容器関連における生産設備(「機械装置及び運搬具」)であります。

リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項 (2)重要な減価償却資産の減

償却の方法」に記載のとおりであります。

なお、所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が、2009年3月20日以前のリース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっており、その内容は次のとおりであります。

(1) リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び期末残高相当額

(単位：百万円)

	前連結会計年度(2022年3月20日)		
	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	期末残高相当額
機械装置及び運搬具	257	90	167
合計	257	90	167

(単位：百万円)

	当連結会計年度(2023年3月20日)		
	取得価額相当額	減価償却累計額相当額	期末残高相当額
機械装置及び運搬具	257	116	141
合計	257	116	141

(2) 未経過リース料期末残高相当額等

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
未経過リース料期末残高相当額		
1年内	24	25
1年超	152	127
合計	177	152

(3) 支払リース料、減価償却費相当額及び支払利息相当額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
支払リース料	30	30
減価償却費相当額	25	25
支払利息相当額	6	5

(4) 減価償却費相当額及び利息相当額の算定方法

減価償却費相当額の算定方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとする定額法によっております。

利息相当額の算定方法

リース料総額とリース物件の取得価額相当額の差額を利息相当額とし、各期への配分方法については、利息法によっております。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取り組み方針

当社グループ(当社及び連結子会社)は、資金運用については短期的な預金等の安全性の高い金融資産に限定し、資金調達については銀行借入及び社債発行等による方針であります。デリバティブは、将来の原材料購入価格・為替・金利の変動によるリスクのヘッジを目的としており、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。当該リスクに関しては、当社

ループの与信管理業務として、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行うとともに、主な取引先の信用状況を定期的に把握する体制を敷いております。

投資有価証券である株式は、市場価格の変動リスクに晒されておりますが、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、経理担当部門が定期的に時価を把握しております。

営業債務である支払手形及び買掛金は、そのほとんどが120日以内の支払期日であります。一部外貨建てのものについては、為替の変動リスクに晒されておりますが、先物為替予約を利用してヘッジしております。

変動金利の借入金は、金利の変動リスクに晒されておりますが、このうち長期のものの一部については、金利の変動リスクを回避し支払利息の固定化を図るために、個別契約ごとにデリバティブ取引(金利スワップ取引)をヘッジ手段として利用しております。

ヘッジ会計の方法については「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」の「4.(7)」に記載のとおりであります。

また、取引に係るリスク管理体制につきましては、当社においては、デリバティブ取引に係る契約締結業務は、財務部経理グループが担当しており、当社稟議規程により、役員合議の後、社長決裁を受けております。連結子会社においては、各社の取締役会決議を経て経理担当部署が管理しており、契約締結業務は当社の財務部経理グループに連絡した上で行っております。

営業債務や借入金は、流動性リスクに晒されておりますが、当社グループでは、各社が適時に資金繰り計画を作成する等の方法により管理しております。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。また、注記事項「デリバティブ取引関係」におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、市場価格のない株式等は、次表には含めておりません。

前連結会計年度(2022年3月20日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 投資有価証券	6,286	6,286	-
資産計	6,286	6,286	-
(2) 社債(1年内償還予定含む)	9,265	9,211	53
(3) 長期借入金(1年内返済予定含む)	11,378	11,365	12
(4) リース債務(1年内返済予定含む)(2)	4,208	4,162	45
負債計	24,852	24,740	112
デリバティブ取引(3)	38	38	-

(1) 現金及び預金、有価証券(譲渡性預金)、受取手形及び売掛金、支払手形及び買掛金、短期借入金(1年内返済予定の長期借入金を除く)、未払金並びに未払法人税等については、現金であること並びに短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

(2) 利息相当額を控除しない方法によっているリース債務3百万円は含めておりません。

(3) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で示しております。

当連結会計年度(2023年3月20日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 投資有価証券	6,164	6,164	-
資産計	6,164	6,164	-
(2) 社債(1年内償還予定含む)	8,618	8,569	48
(3) 長期借入金(1年内返済予定含む)	15,186	15,230	43
(4) リース債務(1年内返済予定含む)(2)	3,177	3,111	66
負債計	26,982	26,912	70
デリバティブ取引(3)	14	14	-

(1)現金及び預金、有価証券(譲渡性預金)、受取手形及び売掛金、支払手形及び買掛金、短期借入金(1年内返済予定の長期借入金を除く)、未払金並びに未払法人税等については、現金であること並びに短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

(2)利息相当額を控除しない方法によっているリース債務2百万円は含めておりません。

(3)デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で示しております。

3. 市場価格のない株式等の連結貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

(単位:百万円)

区分	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
非上場株式等	636	637

これらについては市場価格がないため、「(1)有価証券及び投資有価証券」には含めておりません。

4. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(2022年3月20日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	4,138	-	-	-
受取手形及び売掛金	15,071	-	-	-
有価証券及び投資有価証券 その他有価証券のうち満期があるもの (譲渡性預金)	1,200	-	-	-
合計	20,410	-	-	-

当連結会計年度(2023年3月20日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	5,074	-	-	-
受取手形及び売掛金	15,767	-	-	-
有価証券及び投資有価証券 その他有価証券のうち満期があるもの (譲渡性預金)	1,000	-	-	-
合計	21,841	-	-	-

5. 社債、長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度(2022年3月20日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	7,910	-	-	-	-	-
社債	647	539	477	1,802	1,477	4,320
長期借入金	647	485	1,231	781	181	141
リース債務	1,531	1,129	761	324	161	302
長期未払金	195	195	195	195	195	391
合計	10,932	2,350	2,666	3,104	2,016	5,156

当連結会計年度(2023年3月20日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	2,640	-	-	-	-	-
社債	539	477	1,802	1,477	1,420	2,900
長期借入金	1,526	2,351	2,126	1,526	2,230	5,425
リース債務	1,255	944	468	184	120	206
長期未払金	195	195	195	195	195	195
合計	6,157	3,969	4,593	3,384	3,967	8,727

6. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品

当連結会計年度(2023年3月20日)

区分	時価(百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券				
其他有価証券				
株式	6,164	-	-	6,164
デリバティブ取引	-	14	-	14
資産計	6,164	14	-	6,178

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

当連結会計年度(2023年3月20日)

区分	時価(百万円)			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
社債(1年内償還予定含む)	-	8,569	-	8,569
長期借入金(1年内返済予定含む)	-	15,230	-	15,230
リース債務(1年内返済予定含む)	-	3,111	-	3,111
負債計	-	26,912	-	26,912

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

投資有価証券

上場株式は相場価格を用いて評価しております。上場株式は活発な市場で取引されているため、その時価をレベル1の時価に分類しております。

デリバティブ取引

為替予約の時価は、取引先金融機関から提示された時価を用いており、その時価は為替レート等の観察可能なインプットを用いて算出されていることから、レベル2の時価に分類しております。

社債、長期借入金、リース債務

これらの時価は、元利金の合計額()と、当該債務の残存期間及び信用リスクを加味した利率を基に、割引現在価値法により算定しており、レベル2の時価に分類しております。

()金利スワップの特例処理の対象とされた長期借入金については、その金利スワップのレートによる元利金の合計額

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(2022年3月20日)

	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	(1) 株式	6,024	2,011	4,013
	(2) 債券			
	国債・ 地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	6,024	2,011	4,013
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	(1) 株式	261	332	70
	(2) 債券			
	国債・ 地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3) その他	1,200	1,200	-
	小計	1,461	1,532	70
合計		7,486	3,543	3,942

当連結会計年度(2023年3月20日)

	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	(1) 株式	5,927	2,052	3,874
	(2) 債券			
	国債・ 地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	5,927	2,052	3,874
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	(1) 株式	237	304	67
	(2) 債券			
	国債・ 地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3) その他	1,000	1,000	-
	小計	1,237	1,304	67
合計		7,164	3,357	3,807

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)
 該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
 該当事項はありません。

3. 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)
 該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
 該当事項はありません。

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 通貨関連

前連結会計年度(2022年3月20日)

ヘッジ会計 の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超 (百万円)	時価(百万円)
原則的処理 方法	為替予約取引 買建 米ドル	買掛金	988	-	38
為替予約等の 振当処理	為替予約取引 買建 米ドル	買掛金	109	-	(注)

(注) 為替予約等の振当処理によるものは、ヘッジ対象とされている買掛金と一体として処理されているため、その時価は、当該買掛金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度(2023年3月20日)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等(百万円)	契約額等のうち1年超(百万円)	時価(百万円)
原則的処理方法	為替予約取引 買建 米ドル	買掛金	906	-	14
為替予約等の振当処理	為替予約取引 買建 米ドル	買掛金	66	-	(注)

(注) 為替予約等の振当処理によるものは、ヘッジ対象とされている買掛金と一体として処理されているため、その時価は、当該買掛金の時価に含めて記載しております。

(2) 金利関連

前連結会計年度(2022年3月20日)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等(百万円)	契約額等のうち1年超(百万円)	時価(百万円)
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 変動受取・固定支払	長期借入金	287	84	(注)

(注) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度(2023年3月20日)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等(百万円)	契約額等のうち1年超(百万円)	時価(百万円)
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 変動受取・固定支払	長期借入金	1,934	165	(注)

(注) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社は、主として確定給付企業年金制度及び退職一時金制度を設けております。また、当社は従業員の退職に際して割増退職金を支払う場合があります。

なお、一部の子会社は確定拠出型の制度である中小企業退職金共済制度に加入しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
退職給付債務の期首残高	8,968百万円	9,155百万円
勤務費用	502	419
利息費用	30	29
数理計算上の差異の発生額	126	32
退職給付の支払額	264	1,216
為替換算差額	44	22
退職給付債務の期末残高	9,155	8,377

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
年金資産の期首残高	3,462百万円	3,636百万円
期待運用収益	76	80
数理計算上の差異の発生額	22	167
事業主からの拠出額	183	175
退職給付の支払額	123	472
為替換算差額	15	5
年金資産の期末残高	3,636	3,257

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
積立型制度の退職給付債務	8,552百万円	7,723百万円
年金資産	3,636	3,257
	4,916	4,466
非積立型制度の退職給付債務	602	653
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	5,519	5,120
退職給付に係る負債	5,519	5,120
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	5,519	5,120

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
勤務費用	502百万円	419百万円
利息費用	30	29
期待運用収益	76	80
数理計算上の差異の費用処理額	69	66
過去勤務費用の処理額	17	17
確定給付制度に係る退職給付費用	508	417

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
数理計算上の差異	218百万円	69百万円
過去勤務費用	17	17

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
未認識数理計算上の差異	116百万円	172百万円
過去勤務費用	137	120

(7) 年金資産に関する事項

年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
共同運用資産	81.4%	80.7%
生保一般勘定	14.1	14.5
その他	4.5	4.8
合計	100.0	100.0

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産から現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
割引率	0.1%～0.8%	0.1%～1.9%
長期期待運用収益率	2.0%	2.0%

(注) 予想昇給率について、主に決算日を基準として算定した年齢別昇給指数を使用しております。

3. 確定拠出制度

連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度16百万円、当連結会計年度16百万円であります。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
繰延税金資産		
退職給付に係る負債	1,688百万円	1,475百万円
繰越欠損金	580	1,447
減価償却資産	1,096	722
投資有価証券評価損	455	455
長期未払金	212	297
棚卸資産評価損	236	210
賞与引当金	196	192
汚染負荷量引当金	129	123
土地	68	68
未払社会保険料	52	51
その他	150	83
繰延税金資産小計	4,867	5,127
評価性引当額(注2)	3,140	3,464
繰延税金資産合計	1,727	1,662
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	1,217	1,149
資産評価差額金	427	426
為替差益	-	101
負債調整勘定	45	36
繰延ヘッジ損益	12	4
その他	14	4
繰延税金負債合計	1,717	1,722
繰延税金資産又は繰延税金負債の純額	9	59

(注) 1. 上記のほか再評価に係る繰延税金負債が前連結会計年度3,399百万円、当連結会計年度3,399百万円計上されております。

(注) 2. 評価性引当額が324百万円増加していますが、この主な内容は提出会社における税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額の増加であります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2022年3月20日)	当連結会計年度 (2023年3月20日)
法定実効税率	30.6%	30.6%
(調整)		
評価性引当額の増減	3.9	37.2
住民税均等割	0.9	2.9
交際費	0.5	2.6
海外子会社税率差異	0.0	4.6
その他	0.7	0.9
税効果会計適用後の法人税等の負担率	35.3	67.9

(賃貸等不動産関係)

当社グループは、茨城県、愛知県、兵庫県及びその他の地域において、賃貸用の工業施設等を有しております。前連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は127百万円（賃貸収益は営業外収益に、賃貸費用は営業外費用に計上）であります。当連結会計年度における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は81百万円（賃貸収益は営業外収益に、賃貸費用は営業外費用に計上）であります。

また、当該賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額、期中増減額及び時価は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

		前連結会計年度 (自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
連結貸借対照表計上額	期首残高	3,741	3,685
	期中増減額	56	1,405
	期末残高	3,685	5,091
期末時価		4,628	6,898

- (注) 1. 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額を控除した金額であります。
2. 当期末の時価は、主として固定資産税評価額等の指標を用いて合理的に算定したものであります。

(収益認識関係)

当連結会計年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)

1. 顧客との契約から生じる収益認識を分解した情報
顧客との契約から生じる収益の分解情報は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	報告セグメント						その他	合計
	ガラス びん 関連	ハウス ウェア 関連	紙容器 関連	プラス チック 容器 関連	産 業 器 材 関 連	計		
顧客との契約から 生じる収益								
国内	14,539	10,184	7,147	14,526	2,498	48,895	3,741	52,636
海外	-	3,060	-	-	-	3,060	1,052	4,112
計	14,539	13,244	7,147	14,526	2,498	51,955	4,793	56,749

2. 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報
(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)の「4. 会計方針に関する事項(8) 重要な収益及び費用の計上基準」に記載のとおりであります。
3. 当連結会計年度及び翌連結会計年度以降の収益の金額を理解するための情報
- (1) 契約負債の残高
当社及び連結子会社の契約負債については、残高に重要性が乏しいことから記載を省略しております。
- (2) 残存履行義務に配分した取引価格
当社及び連結子会社については、当初の予想契約期間が1年を超える重要な取引がないため、残存履行義務に関する情報の記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

- (1) 報告セグメントの決定方法

当社の報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、経営意思決定機関が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、ガラスびん・ハウスウェア・紙容器・プラスチック容器・産業器材の製造及び販売、並びにこれに関連した事業活動を展開しております。

したがって、当社は、これらの事業活動から「ガラスびん関連事業」・「ハウスウェア関連事業」・「紙容器関連事業」・「プラスチック容器関連事業」・「産業器材関連事業」の5つを報告セグメントとしております。

- (2) 各報告セグメントに属する製品及びサービス

「ガラスびん関連事業」は、ガラス製容器等を製造・販売しております。「ハウスウェア関連事業」は、ガラス製及び陶磁器製食器等を製造・販売しております。「紙容器関連事業」は、紙容器及び紙容器に係る充填機械の販売・メンテナンスをしております。「プラスチック容器関連事業」は、PETボトル用ブリフォーム等を製造・販売しております。「産業器材関連事業」は、主に加熱調理用器具のトッププレート等を製造・販売しております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報
前連結会計年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)

(単位：百万円)

	報告セグメント						その他 (注1)	合計	調整額 (注2)	連結 財務諸表 計上額 (注4)
	ガラス びん 関連	ハウス ウェア 関連	紙容器 関連	プラス チック 容器 関連	産 器 器 材 関連	業 材 材 材 計				
売上高										
外部顧客への売上高	14,099	11,403	6,938	29,309	2,400	64,151	5,232	69,384	-	69,384
セグメント間の内部 売上高又は振替高	0	2	-	391	-	394	5,601	5,995	5,995	-
計	14,100	11,406	6,938	29,701	2,400	64,545	10,834	75,379	5,995	69,384
セグメント利益又は 損失()	54	170	447	2,102	489	1,919	691	2,611	1	2,612
セグメント資産	16,266	12,389	6,506	23,246	2,286	60,695	9,445	70,141	11,955	82,097
その他の項目										
減価償却費	881	540	269	1,830	75	3,596	100	3,696	-	3,696
有形固定資産及び無 形固定資産の増加額	476	310	105	1,007	20	1,919	137	2,056	-	2,056

当連結会計年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)

(単位：百万円)

	報告セグメント						その他 (注1)	合計	調整額 (注3)	連結 財務諸表 計上額 (注4)
	ガラス びん 関連	ハウス ウェア 関連	紙容器 関連	プラス チック 容器 関連	産 器 器 材 関連	業 材 材 材 計				
売上高										
顧客との契約から生 じる収益	14,539	13,244	7,147	14,526	2,498	51,955	4,793	56,749	-	56,749
その他の収益	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
外部顧客への売上高	14,539	13,244	7,147	14,526	2,498	51,955	4,793	56,749	-	56,749
セグメント間の内部 売上高又は振替高	-	-	-	399	-	399	5,788	6,187	6,187	-
計	14,539	13,244	7,147	14,926	2,498	52,355	10,581	62,936	6,187	56,749
セグメント利益又は 損失()	754	315	142	2,028	371	1,817	390	2,207	3	2,210
セグメント資産	10,172	12,647	5,493	28,916	2,372	59,603	9,329	68,932	17,604	86,536
その他の項目										
減価償却費	709	486	254	1,630	66	3,148	106	3,254	-	3,254
有形固定資産及び無 形固定資産の増加額	449	767	82	3,923	67	5,291	237	5,528	-	5,528

(注) 1. 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、当社及び子会社の一部の事業を含んでおります。

2. 前連結会計年度におけるセグメント利益又は損失()の調整額1百万円には、棚卸資産の調整額1百万円、その他0百万円が含まれております。また、セグメント資産の調整額11,955百万円には、管理部門に帰属する全社資産等12,595百万円、債権・債務消去 629百万円、棚卸資産の調整額 14百万円、その他5百万円が含まれております。

3. 当連結会計年度におけるセグメント利益又は損失()の調整額3百万円には、棚卸資産の調整額3百万円、その他 0百万円が含まれております。また、セグメント資産の調整額17,604百万円には、管理部門に帰属する全社資産等18,118百万円、債権・債務消去 506百万円、棚卸資産の調整額 11百万円、その他4百万円が含まれております。

4. セグメント利益又は損失()は、連結財務諸表の営業利益と調整を行っております。

【関連情報】

前連結会計年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
コカ・コーラ ボトラーズジャパン株式会社	12,865	プラスチック容器関連
アサヒ飲料株式会社	7,763	プラスチック容器関連

当連結会計年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)

(単位：百万円)

	報告セグメント						その他	全社・消去	合計
	ガラスびん 関連	ハウスウェア 関連	紙容器 関連	プラスチック 容器関連	産業器材 関連	計			
減損損失	-	47	25	78	-	152	-	-	152

当連結会計年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)

(単位：百万円)

	報告セグメント						その他	全社・消去	合計
	ガラスびん 関連	ハウスウェア 関連	紙容器 関連	プラスチック 容器関連	産業器材 関連	計			
減損損失	50	113	-	-	-	163	-	-	163

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
 該当事項はありません。

【関連当事者情報】

前連結会計年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)
 該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
 該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
1株当たり純資産額	6,031円64銭	5,997円88銭
1株当たり当期純利益	538円49銭	60円26銭

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)	当連結会計年度 (自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
親会社株主に帰属する当期純利益(百万円)	2,254	252
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	2,254	252
期中平均株式数(千株)	4,185	4,185

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
石塚硝子株式会社	第39回無担保社債	2016年 12月28日	65 (33)	32 (32)	0.34	なし	2023年 12月28日
石塚硝子株式会社	第40回無担保社債	2017年 1月31日	54 (24)	30 (30)	0.24	なし	2024年 1月31日
石塚硝子株式会社	第41回無担保社債	2017年 3月30日	600 (-)	600 (-)	0.45	なし	2027年 3月31日
石塚硝子株式会社	第42回無担保社債	2017年 6月30日	68 (68)	- (-)	0.32	なし	2022年 6月30日
石塚硝子株式会社	第43回無担保社債	2017年 6月30日	43 (43)	- (-)	0.20	なし	2022年 6月30日
石塚硝子株式会社	第44回無担保社債	2018年 3月26日	400 (-)	400 (-)	0.69	なし	2028年 3月24日
石塚硝子株式会社	第45回無担保社債	2018年 9月28日	600 (-)	600 (-)	0.51	なし	2026年 9月30日
石塚硝子株式会社	第46回無担保社債	2018年 12月10日	1,500 (-)	1,500 (-)	0.31	なし	2028年 12月8日
石塚硝子株式会社	第47回無担保社債	2018年 12月28日	1,500 (-)	1,500 (-)	0.46	なし	2027年 12月30日
石塚硝子株式会社	第48回無担保社債	2019年 9月25日	500 (-)	500 (-)	0.14	なし	2029年 9月25日
石塚硝子株式会社	第49回無担保社債	2020年 3月30日	395 (70)	325 (70)	0.04	なし	2027年 3月30日
石塚硝子株式会社	第50回無担保社債	2020年 3月30日	313 (57)	256 (57)	0.17	なし	2027年 3月30日
石塚硝子株式会社	第51回無担保社債	2020年 3月31日	735 (210)	525 (210)	0.20	なし	2025年 3月31日
石塚硝子株式会社	第52回無担保社債	2020年 3月31日	490 (140)	350 (140)	0.15	なし	2025年 3月31日
石塚硝子株式会社	第53回無担保社債	2020年 3月31日	500 (-)	500 (-)	0.26	なし	2029年 9月25日
石塚硝子株式会社	第54回無担保社債	2020 6月25日	500 (-)	500 (-)	0.21	なし	2025年 6月25日
日本パリソン株式会社	第10回無担保社債	2018年 3月30日	1,000 (-)	1,000 (-)	0.34	なし	2025年 3月31日
合計	-	-	9,265 (647)	8,618 (539)	-	-	-

(注) 1. ()内書は、1年以内の償還予定額であります。

2. 連結決算日後5年以内における償還予定額は以下のとおりであります。

1年以内 (百万円)	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
539	477	1,802	1,477	1,420

【借入金等明細表】

区分	当期末首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	7,910	2,640	0.7	-
1年以内に返済予定の長期借入金	647	1,526	0.9	-
1年以内に返済予定のリース債務	1,531	1,255	-	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	2,821	13,660	1.0	2024年～2033年
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	2,680	1,925	-	2024年～2030年
その他有利子負債				
1年以内に返済予定の長期未払金	195	195	0.6	-
長期未払金(1年以内に返済予定のものを除く。)	1,174	978	0.6	2024年～2028年
計	16,960	22,181	-	-

(注) 1. 平均利率については、期末借入金等に対する加重平均利率を記載しております。なお、リース債務については、一部の連結子会社においてリース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額で連結貸借対照表に計上しているため、平均利率は記載しておりません。

2. 長期借入金、リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)及び長期未払金の連結決算日後5年内における1年ごとの返済予定額の総額は次のとおりであります。

区分	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	2,351	2,126	1,526	2,230
リース債務	944	468	184	120
長期未払金	195	195	195	195

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2) 【その他】

(当連結会計年度における四半期情報等)

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (百万円)	14,927	29,413	43,860	56,749
税金等調整前四半期(当期) 純利益 (百万円)	1,162	800	1,101	1,025
親会社株主に帰属する四半 期(当期)純利益 (百万円)	728	126	197	252
1株当たり四半期(当期)純 利益 (円)	173.94	30.30	47.16	60.26

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益又は 1株当たり四半期純損失 (円)	173.94	143.64	16.86	13.09

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年3月20日)	当事業年度 (2023年3月20日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	2,288	2,784
受取手形	1,370	1,680
売掛金	1 9,962	1 10,504
商品及び製品	7,751	7,088
仕掛品	172	58
原材料及び貯蔵品	1,432	1,094
未収入金	1 3,629	1 4,158
関係会社短期貸付金	3,760	6,462
有償受給に係る資産	-	2,097
その他	1 339	1 990
貸倒引当金	1	2
流動資産合計	30,705	36,918
固定資産		
有形固定資産		
建物	2 4,914	2 4,467
構築物	2 366	2 323
機械及び装置	2 1,848	2 1,564
車両運搬具	2 10	2 6
工具、器具及び備品	2 567	2 547
土地	2 12,456	2 12,456
リース資産	748	713
建設仮勘定	49	2,395
有形固定資産合計	20,960	22,475
無形固定資産		
ソフトウェア	25	17
その他	11	10
無形固定資産合計	36	28
投資その他の資産		
投資有価証券	2 4,465	2 4,412
関係会社株式	11,063	11,063
関係会社長期貸付金	146	109
その他	1 658	1 430
貸倒引当金	15	15
投資その他の資産合計	16,317	16,000
固定資産合計	37,315	38,504
繰延資産		
社債発行費	193	152
繰延資産合計	193	152
資産合計	68,214	75,575

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年3月20日)	当事業年度 (2023年3月20日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	315	287
買掛金	1 13,253	1 14,469
短期借入金	1, 2 9,747	1, 2 4,016
1年内償還予定の社債	647	539
リース債務	298	269
未払金	2 1,062	2 2,140
未払費用	1 1,730	1 1,657
未払消費税等	198	103
前受金	100	68
預り金	1 195	1 96
賞与引当金	281	239
設備関係支払手形	137	134
有償支給に係る負債	-	2,097
その他	1 121	1 600
流動負債合計	28,089	26,723
固定負債		
社債	7,618	7,078
長期借入金	2,483	13,268
リース債務	844	584
長期未払金	2 1,291	2 1,071
再評価に係る繰延税金負債	2,614	2,614
退職給付引当金	4,211	3,850
汚染負荷量引当金	423	402
その他	1 628	1 30
固定負債合計	20,114	28,899
負債合計	48,204	55,623
純資産の部		
株主資本		
資本金	6,344	6,344
資本剰余金		
資本準備金	3,391	3,391
その他資本剰余金	1,174	1,174
資本剰余金合計	4,566	4,566
利益剰余金		
利益準備金	1	1
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	2,183	2,146
利益剰余金合計	2,184	2,147
自己株式	85	86
株主資本合計	13,009	12,972
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	1,660	1,640
土地再評価差額金	5,340	5,340
評価・換算差額等合計	7,000	6,980
純資産合計	20,009	19,952
負債純資産合計	68,214	75,575

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2021年 3月21日 至 2022年 3月20日)	当事業年度 (自 2022年 3月21日 至 2023年 3月20日)
売上高	1 54,593	1 36,739
売上原価	1 48,271	1 31,512
売上総利益	6,322	5,227
販売費及び一般管理費	1,2 5,416	1,2 5,329
営業利益又は営業損失()	906	102
営業外収益		
受取利息及び配当金	1 801	1 1,503
受取賃貸料	1 1,214	1 1,083
その他	1 203	1 187
営業外収益合計	2,219	2,773
営業外費用		
支払利息	1 175	1 197
賃貸収入原価	577	499
その他	1 271	434
営業外費用合計	1,024	1,131
経常利益	2,101	1,539
特別損失		
減損損失	-	96
工場閉鎖関連損失	-	3 1,178
特別損失合計	-	1,274
税引前当期純利益	2,101	265
法人税、住民税及び事業税	170	13
法人税等調整額	269	91
法人税等合計	439	105
当期純利益	1,661	159

【株主資本等変動計算書】
前事業年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)

(単位：百万円)

	株主資本								自己株式	株主資本 合計
	資本金	資本剰余金			利益剰余金					
		資本準備金	その他資本 剰余金	資本剰余 金合計	利益準備金	その他利益 剰余金 繰越利益 剰余金	利益剰余 金合計			
当期首残高	6,344	3,391	1,174	4,566	1	521	522	85	11,347	
会計方針の変更による累積 的影響額									-	
会計方針の変更を反映した当 期首残高	6,344	3,391	1,174	4,566	1	521	522	85	11,347	
当期変動額										
剰余金の配当									-	
当期純利益						1,661	1,661		1,661	
自己株式の取得								0	0	
株主資本以外の項目の当期 変動額（純額）										
当期変動額合計	-	-	-	-	-	1,661	1,661	0	1,661	
当期末残高	6,344	3,391	1,174	4,566	1	2,183	2,184	85	13,009	

	評価・換算差額等				純資産合計
	その他有価証券評 価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価差額金	評価・換算差額等 合計	
当期首残高	1,950	15	5,340	7,306	18,654
会計方針の変更による累積 的影響額					-
会計方針の変更を反映した当 期首残高	1,950	15	5,340	7,306	18,654
当期変動額					
剰余金の配当					-
当期純利益					1,661
自己株式の取得					0
株主資本以外の項目の当期 変動額（純額）	290	15	-	306	306
当期変動額合計	290	15	-	306	1,355
当期末残高	1,660	-	5,340	7,000	20,009

当事業年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)

(単位：百万円)

	株主資本							自己株式	株主資本 合計
	資本金	資本剰余金			利益剰余金				
		資本準備金	その他資 本剰余金	資本剰余 金合計	利益準備金	その他利 益剰余金 繰越利益 剰余金	利益剰余 金合計		
当期首残高	6,344	3,391	1,174	4,566	1	2,183	2,184	85	13,009
会計方針の変更による累積 的影響額						7	7		7
会計方針の変更を反映した当 期首残高	6,344	3,391	1,174	4,566	1	2,175	2,176	85	13,001
当期変動額									
剰余金の配当						188	188		188
当期純利益						159	159		159
自己株式の取得								0	0
株主資本以外の項目の当期 変動額（純額）									
当期変動額合計	-	-	-	-	-	29	29	0	29
当期末残高	6,344	3,391	1,174	4,566	1	2,146	2,147	86	12,972

	評価・換算差額等				純資産合計
	その他有価証券評 価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価差額金	評価・換算差額等 合計	
当期首残高	1,660	-	5,340	7,000	20,009
会計方針の変更による累積 的影響額					7
会計方針の変更を反映した当 期首残高	1,660	-	5,340	7,000	20,001
当期変動額					
剰余金の配当					188
当期純利益					159
自己株式の取得					0
株主資本以外の項目の当期 変動額（純額）	19	-	-	19	19
当期変動額合計	19	-	-	19	49
当期末残高	1,640	-	5,340	6,980	19,952

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券

子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

(2) デリバティブ

時価法

(3) 棚卸資産

商品・製品・原材料・仕掛品

総平均法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

貯蔵品

受払記録のあるもの

総平均法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

その他のもの

最終仕入原価法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

2. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

岩倉工場・東京工場・姫路工場・福崎工場

定額法

上記以外

定率法

ただし、1998年4月1日以降に取得した建物並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は、以下のとおりであります。

建物 3～47年

機械及び装置 2～9年

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法

ただし、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法を採用しております。

(3) リース資産

所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法を採用しております。

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとする定額法を採用しております。

なお、所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が2009年3月20日以前のリース取引については、通常の賃貸借取引に係る方法に準じた会計処理によっております。

3. 繰延資産の処理方法

社債発行費

社債の償還までの期間にわたり定額法により償却しております。

4. 外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

5. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与支払に備えるため、支給見込額のうち、当事業年度に負担すべき額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を計上しております。

数理計算上の差異は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理することとしております。

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理することとしております。

(4) 汚染負荷量引当金

当社が吸収合併した旧(株)アサヒピールボックスが過去に有していた吹田及び関東工場に係る汚染負荷量賦課金の支払に備えるため、将来にわたって発生する汚染負荷量賦課金総額の現在価値を汚染負荷量引当金として計上しております。

6. 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び過去勤務費用の未処理額の会計処理方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

7. 重要な収益認識の計上基準

当社の顧客との契約から生じる収益に関する主要な事業における主な履行義務の内容及び当該履行義務を充足する通常の時点(収益を認識する通常の時点)は以下のとおりであります。

当社は、ガラスびん・ハウスウェア・プラスチック容器の製造及び販売、並びにこれらに関連した事業活動を展開しております。製品の製造・販売については、主に完成した製品を顧客に引き渡すことを履行義務として識別しております。したがって、製品を引き渡した時点で当該製品に対する支配が顧客に移転し履行義務が充足されると判断し、当該時点で収益を認識しております。なお、国内の販売については、出荷時から当該製品の支配が顧客に移転されるまでの期間が通常の間である場合には、原則として出荷時に収益を認識しております。また、輸出取引については、インコタームズ等で定められた貿易条件に基づきリスク負担が顧客に移転した時点で収益を認識しております。

その他に、顧客から原材料等を仕入れ加工を行ったうえで当該顧客に販売する有償受給取引においては、顧客に支払われる対価に該当するものと判断し、原材料等の仕入価格を除いた対価の純額で収益を認識しております。

なお、これらの履行義務に対する対価は、履行義務を充足してから1年以内に受領しており、重要な金融要素は含まれておりません。

8. ヘッジ会計の方法

原則として、繰延ヘッジ処理によって行うこととしております。なお、為替予約及び通貨オプションについては、振当処理の要件を満たしているものは振当処理を、特例処理の要件を満たしている金利スワップについては、特例処理によっております。

(重要な会計上の見積り)

前事業年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)

(固定資産の減損損失の認識の要否)

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

当事業年度において、ガラスびん事業の資産グループ(帳簿価額3,785百万円)及びガラス食器事業の資産グループ(帳簿価額2,238百万円)について減損の兆候が認められたことから、減損損失の計上の要否について検討を行いました。検討の結果、割引前将来キャッシュ・フローが各資産グループの帳簿価額を上回っていることから、減損損失は認識しておりません。

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当事業年度の財務諸表に計上した金額の算出方法

当社は事業用資産について、主として事業単位でグルーピングを行っております。収益性の低下や著しい経営環境の悪化等により減損の兆候がある資産グループがある場合には、当該資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フローの総額が帳簿価額を下回った場合、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として認識します。

当事業年度の財務諸表に計上した金額の算出に用いた主要な仮定

減損の兆候がある資産グループから得られる将来キャッシュ・フローの見積りにあたっては、翌年度事業計画等を基礎としており、その主要な仮定はエネルギー価格とこれを反映した売上単価であります。

翌事業年度に係る財務諸表に与える影響

見積りの主要な仮定は、財務諸表作成時点において入手可能な外部データや過去からの実績の長期趨勢に基

づいており、地政学的問題に伴うエネルギー価格の動向の予測が難しく、不確実性を伴うものであるため、割引前将来キャッシュ・フローの見積り額的前提とした条件や仮定に変更が生じた場合には、翌事業年度の財務諸表に影響を及ぼす可能性があります。

当事業年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)

(固定資産の減損損失の認識の要否)

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

当事業年度において、ガラスびん事業の資産グループ(帳簿価額3,483百万円)及びガラス食器事業の資産グループ(帳簿価額2,524百万円)について減損の兆候が認められたことから、減損損失の計上の要否について検討を行いました。検討の結果、割引前将来キャッシュ・フローが各資産グループの帳簿価額を上回っていることから、減損損失は認識しておりません。

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当事業年度の財務諸表に計上した金額の算出方法

当社は事業用資産について、主として事業単位でグルーピングを行っております。収益性の低下や著しい経営環境の悪化等により減損の兆候がある資産グループがある場合には、当該資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フローの総額が帳簿価額を下回った場合、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として認識します。

当事業年度の財務諸表に計上した金額の算出に用いた主要な仮定

減損の兆候がある資産グループから得られる将来キャッシュ・フローの見積りにあたっては、翌年度事業計画等を基礎としており、その主要な仮定はエネルギー価格とこれを反映した売上単価であります。

翌事業年度に係る財務諸表に与える影響

見積りの主要な仮定は、財務諸表作成時点において入手可能な外部データや過去からの実績の長期趨勢に基づいており、地政学的問題を発端とするエネルギー価格の動向を予測することは難しく不確実性を伴うものであるため、割引前将来キャッシュ・フローの見積り額的前提とした条件や仮定に変更が生じた場合には、翌事業年度の財務諸表に影響を及ぼす可能性があります。

(会計方針の変更)

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識することとしております。

収益認識会計基準等の適用による主な変更点は以下の通りです。

(1) 顧客に支払われる対価

販売手数料等の顧客に支払われる対価について、従来は主に販売費及び一般管理費に計上してはりましたが、売上高から控除する方法に変更しております。また、顧客から原材料等を仕入れ、加工を行ったうえで当該顧客に販売する有償受給取引において、従来は仕入価格を含めた対価の総額で収益を認識してはりましたが、原材料等の仕入価格を除いた対価の純額で収益を認識する方法に変更しております。

(2) 輸出取引

出荷時に収益を認識していた輸出版売の一部において、インコタームズ等で定められた貿易条件に基づきリスク負担が顧客に移転した時点で収益を認識する方法に変更しております。

収益認識会計基準等の適用については、収益認識会計基準第84項ただし書きに定める経過的な取扱いに従っており、当事業年度の期首より前に新たな会計方針を遡及適用した場合の累積的影響額を、当事業年度の期首の利益剰余金に加減し、当該期首残高から新たな会計方針を適用しております。

この結果、当事業年度の売上高が19,186百万円、売上原価が19,177百万円、販売費及び一般管理費が5百万円並びに営業外費用が11百万円減少しました。したがって、営業利益が3百万円減少し、経常利益及び税引前当期純利益がそれぞれ7百万円増加しております。また、繰越利益剰余金の当期首残高は7百万円減少しております。

なお、収益認識会計基準第89-3項に定める経過的な取扱いに従って、前事業年度について新たな表示方法により組替えを行っておりません。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することといたしました。なお、財務諸表に与える影響はありません。

(貸借対照表関係)

1 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務(区分表示されたものを除く)

	前事業年度 (2022年3月20日)	当事業年度 (2023年3月20日)
短期金銭債権	4,522百万円	4,639百万円
長期金銭債権	8	8
短期金銭債務	10,844	11,633
長期金銭債務	0	0

2 担保に供している資産及び担保に係る債務

(1) 担保提供資産

	前事業年度 (2022年3月20日)	当事業年度 (2023年3月20日)
建物	1,620百万円	1,492百万円
構築物	200	186
機械及び装置	1,690	1,539
車両運搬具	10	6
工具、器具及び備品	443	530
土地	6,099	6,099
投資有価証券	2,031	1,901
計	12,096	11,755

上記のうち工場財団抵当に供している資産

	前事業年度 (2022年3月20日)	当事業年度 (2023年3月20日)
建物	1,620百万円	1,492百万円
構築物	200	186
機械及び装置	1,690	1,539
車両運搬具	10	6
工具、器具及び備品	443	530
土地	6,099	6,099
計	10,064	9,854

(2) 担保資産に対応する債務

	前事業年度 (2022年3月20日)	当事業年度 (2023年3月20日)
短期借入金	300百万円	300百万円
未払金	195	195
長期未払金	1,174	978
計	1,670	1,474

上記のうち工場財団抵当に対応する債務

	前事業年度 (2022年3月20日)	当事業年度 (2023年3月20日)
短期借入金	300百万円	300百万円

3 偶発債務

関係会社の金融機関からの借入金等に対する債務保証

	前事業年度 (2022年3月20日)	当事業年度 (2023年3月20日)
大阪アデリア株式会社	137百万円	116百万円
ウイストーン株式会社	63	54
石塚マシントクノ株式会社	-	10
計	200	180

(損益計算書関係)

1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)	当事業年度 (自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
営業取引による取引高		
売上高	2,516百万円	2,551百万円
仕入高	31,519	12,786
その他	4,293	4,657
営業取引以外の取引による取引高		
営業外収益	1,711	2,370
営業外費用	17	13

2 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度53%、当事業年度54%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度47%、当事業年度46%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)	当事業年度 (自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)
運賃	1,918百万円	1,894百万円
従業員給料及び賞与	770	818
賞与引当金繰入額	70	66
退職給付費用	53	66
減価償却費	155	129

3 工場閉鎖関連損失

前事業年度(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)

該当事項はありません。

当事業年度(自 2022年3月21日 至 2023年3月20日)

ガラスびん事業の生産拠点である姫路工場の生産停止に伴い、工場閉鎖関連損失1,178百万円を計上しております。主な内訳は、従業員退職関連費用491百万円、土壌改良費用376百万円、減損損失50百万円、その他260百万円です。

(有価証券関係)

子会社株式(前事業年度の貸借対照表計上額は関係会社株式11,063百万円、当事業年度の貸借対照表計上額は関係会社株式11,063百万円)は市場価格のない株式等のため、時価を記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2022年3月20日)	当事業年度 (2023年3月20日)
繰延税金資産		
退職給付引当金	1,288百万円	1,178百万円
減価償却資産	974	633
繰越欠損金	283	1,085
投資有価証券評価損	331	315
長期未払金	185	116
汚染負荷量引当金	129	123
賞与引当金	86	73
棚卸資産評価損	72	76
会社分割による子会社株式調整額	34	34
未払社会保険料	28	25
その他	33	79
繰延税金資産小計	3,449	3,740
評価性引当額	2,514	2,897
繰延税金資産合計	935	843
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	571	527
会社分割による子会社株式調整額	39	39
資産評価差額金	33	33
繰延税金負債合計	643	599
繰延税金資産の純額	291	243

なお、上記のほか再評価に係る繰延税金負債2,614百万円が前事業年度及び当事業年度にそれぞれ計上されております。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2022年3月20日)	当事業年度 (2023年3月20日)
法定実効税率	30.6%	30.6%
(調整)		
評価性引当額の増減	1.0	150.4
住民税均等割	0.7	5.5
交際費	0.7	7.0
受取配当金	9.8	154.3
その他	0.3	0.7
税効果会計適用後の法人税等の負担率	20.9	39.9

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、(重要な会計方針)「7. 重要な収益認識の計上基準」に記載のとおりであります。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	17,895	68	162 (50)	457	17,801	13,333
	構築物	2,380	1	9 (7)	37	2,372	2,048
	機械及び装置	23,580	220	1,477 (90)	314	22,323	20,759
	車両運搬具	153	-	9	3	143	137
	工具、器具及び備品	3,392	515	937 (3)	458	2,970	2,423
	土地	12,456 (7,954)	-	-	-	12,456 (7,954)	-
	リース資産	2,102	89	396 (10)	113	1,795	1,082
	建設仮勘定	49	2,357	11	-	2,395	-
	計	62,011	3,253	3,005 (161)	1,384	62,259	39,784
無形固定資産	ソフトウェア	81	2	3	10	80	63
	その他	77	-	0	-	77	66
	計	159	2	4	10	158	129

- (注) 1. 当期首残高及び当期末残高は、取得価額にて記載しております。
 2. 当期減少額欄の()内は内書きで、減損損失の計上額であります。
 3. 当期増加額の主なものは次のとおりであります。
 工具、器具及び備品 岩倉・姫路工場 金型 515百万円
 建設仮勘定 姫路工場 プラスチック容器関連 1,857百万円
 4. 当期減少額の主なものは次のとおりであります。
 機械装置 姫路工場 ガラスびん関連 659百万円
 工具、器具及び備品 岩倉・姫路工場 金型
 5. 土地欄の()内は内書きで、「土地の再評価に関する法律」(平成10年3月31日公布法律第34号)及び「土地の再評価に関する法律の一部を改正する法律」(平成13年3月31日公布法律第19号)により行った土地の再評価実施前の帳簿価額との差額であります。

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	17	1	1	17
賞与引当金	281	239	281	239
汚染負荷量引当金	423	17	38	402

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	3月21日から3月20日まで							
定時株主総会	6月中(6月20日まで)							
基準日	3月20日							
剰余金の配当の基準日	3月20日 上記のほか、基準日を定めて剰余金の配当をすることができる。							
1単元の株式数	100株							
単元未満株式の 買取・売渡								
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目3番3号 みずほ信託銀行株式会社 本店証券代行部							
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目3番3号 みずほ信託銀行株式会社							
取次所								
買取・売渡手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額							
公告掲載方法	電子公告により行う。ただし電子公告によることができない事故その他やむを得ない事由が生じたときは、日本経済新聞に掲載して行う。 広告掲載URL https://www.ishizuka.co.jp/							
株主に対する特典	<p>株主優待</p> <p>(1) 対象株主 毎年3月20日時点の株主名簿に記載又は記録された当社株式1単元(100株)以上を保有されている株主を対象といたします。</p> <p>(2) 株主優待の内容</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>保有年数</th> <th>優待内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>3年未満</td> <td>QUO(クオカード) 1,000円分 贈呈</td> </tr> <tr> <td>3年以上</td> <td>QUO(クオカード) 1,000円分 贈呈 + 当社グループ製品(5,000円相当)あるいは 選べるギフト3,000円相当分から一つを選択</td> </tr> </tbody> </table>		保有年数	優待内容	3年未満	QUO(クオカード) 1,000円分 贈呈	3年以上	QUO(クオカード) 1,000円分 贈呈 + 当社グループ製品(5,000円相当)あるいは 選べるギフト3,000円相当分から一つを選択
保有年数	優待内容							
3年未満	QUO(クオカード) 1,000円分 贈呈							
3年以上	QUO(クオカード) 1,000円分 贈呈 + 当社グループ製品(5,000円相当)あるいは 選べるギフト3,000円相当分から一つを選択							

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株主は、以下の権利以外の権利を行使することができません。

会社法第189条第2項各号に掲げる権利

会社法第166条第1項の規定による請求する権利

株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利

単元未満株式の売渡請求をする権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度(第87期)(自 2021年3月21日 至 2022年3月20日)2022年6月17日関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2022年6月17日関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

(第88期第1四半期)(自 2022年3月21日 至 2022年6月20日)2022年7月29日関東財務局長に提出

(第88期第2四半期)(自 2022年6月21日 至 2022年9月20日)2022年10月31日関東財務局長に提出

(第88期第3四半期)(自 2022年9月21日 至 2022年12月20日)2023年2月3日関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)に基づく臨時報告書

2022年6月23日関東財務局長に提出

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2023年6月16日

石塚硝子株式会社
取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

名古屋事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 浅井 明 紀 子

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 牧 野 秀 俊

< 財務諸表監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている石塚硝子株式会社の2022年3月21日から2023年3月20日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、石塚硝子株式会社及び連結子会社の2023年3月20日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

固定資産の減損	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>会社グループは、連結貸借対照表に、2023年3月20日現在、有形固定資産を35,423百万円（総資産の40.9%）計上している。</p> <p>重要な会計上の見積りに記載のとおり、石塚硝子株式会社のガラスびん事業の資産グループの帳簿価額は3,483百万円及び石塚硝子株式会社のガラス食器事業の資産グループの帳簿価額は2,524百万円並びに石塚王子ペーパーパッケージング株式会社の紙容器関連事業の資産グループの帳簿価額は1,033百万円である。</p> <p>会社グループは事業単位でグルーピングを行っており、資産グループはそれぞれガラスびん事業、ガラス食器事業、紙容器関連事業、プラスチック容器事業、産業器材事業等で構成されている。これらの固定資産は定期的に減価償却されるが、減損の兆候があると認められる場合には、減損損失の認識の要否を判定する必要がある。</p> <p>会社は当連結会計年度において、継続的な営業赤字が生じているガラスびん事業及びガラス食器事業並びに紙容器関連事業について減損の兆候を識別している。減損損失の計上要否の検討の結果、当該資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フローが帳簿価額を上回っていたことから、減損損失を計上していない。</p> <p>当該固定資産の減損の認識判定に必要な将来キャッシュ・フローの見積りには、エネルギー価格の将来予測やこれを反映した売上単価の将来予測などの重要な仮定が用いられている。</p> <p>これらの見積りにおける重要な仮定は、経営者の判断に重要な影響を受けるため、監査上の主要な検討事項に該当すると判断した</p>	<p>当監査法人は、有形固定資産の減損損失の認識要否の判定に関する経営者の判断の妥当性を検討するにあたり、主として以下の監査手続を実施した。</p> <p>固定資産の減損に関する会社の内部統制を理解し、整備・運用状況の有効性を評価した。評価にあたっては、特に将来キャッシュ・フローの見積りに関する統制に焦点を当てて評価を実施した。</p> <p>減損の兆候が認められた資産グループについては、会社が見積った将来キャッシュ・フローと取締役会の承認を得た事業計画等との整合性を検討した。</p> <p>経営者による見積りの信頼性を評価するため、リスク評価手続として過去の予算と実績を比較検討した。</p> <p>減損の兆候が認められた事業について、会社の減損認識の判定が適切であるか検討するため、以下の手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エネルギー価格の将来予測や各事業の需要や単価の将来予測などの仮定の根拠について、会社の外部環境と比較検討した。 ・それぞれの仮定が、相互矛盾なく整合的であること、外部環境と比較して不合理な仮定でないことなど、仮定の合理性を評価した。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、石塚硝子株式会社の2023年3月20日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、石塚硝子株式会社が2023年3月20日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- (注) 1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管しております。
2. XBRLデータは監査の対象に含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2023年6月16日

石塚硝子株式会社
取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ
名古屋事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 浅井 明 紀 子

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 牧 野 秀 俊

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている石塚硝子株式会社の2022年3月21日から2023年3月20日までの第88期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、石塚硝子株式会社の2023年3月20日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

固定資産の減損	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>会社は、貸借対照表に、2023年3月20日現在、有形固定資産を22,475百万円（総資産の29.7%）計上している。</p> <p>重要な会計上の見積りに記載のとおり、ガラスびん事業の資産グループの帳簿価額は3,483百万円、ガラス食器事業の資産グループの帳簿価額は2,524百万円である。</p> <p>会社は事業単位でグルーピングを行っており、資産グループはそれぞれガラスびん事業、ガラス食器事業、プラスチック容器事業等で構成されている。これらの固定資産は定期的に減価償却されるが、減損の兆候があると認められる場合には、減損損失の認識の可否を判定する必要がある。</p> <p>会社は当事業年度において、継続的な営業赤字が生じているガラスびん事業及びガラス食器事業について減損の兆候を識別している。減損損失の計上可否の検討の結果、当該資産グループから得られる割引前将来キャッシュ・フローが帳簿価額を上回っていたことから、減損損失を計上していない。</p> <p>当該固定資産の減損の認識判定に必要な将来キャッシュ・フローの見積りには、エネルギー価格の将来予測やこれを反映した売上単価の将来予測などの重要な仮定が用いられている。</p> <p>これらの見積りにおける重要な仮定は、経営者の判断に重要な影響を受けるため、監査上の主要な検討事項に該当すると判断した。</p>	<p>当監査法人は、有形固定資産の減損損失の認識要否の判定に関する経営者の判断の妥当性を検討するにあたり、主として以下の監査手続を実施した。</p> <p>固定資産の減損に関する会社の内部統制を理解し、整備・運用状況の有効性を評価した。評価にあたっては、特に将来キャッシュ・フローの見積りに関する統制に焦点を当てて評価を実施した。</p> <p>減損の兆候が認められた資産グループについては、会社が見積った将来キャッシュ・フローと取締役会の承認を得た事業計画等との整合性を検討した。</p> <p>経営者による見積りの信頼性を評価するため、リスク評価手続として過去の予算と実績を比較検討した。</p> <p>減損の兆候が認められた事業について、会社の減損認識の判定が適切であるか検討するため、以下の手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エネルギー価格の将来予測や各事業の需要や単価の将来予測などの仮定の根拠について、会社の外部環境と比較検討した。 ・それぞれの仮定が、相互矛盾なく整合的であること、外部環境と比較して不合理な仮定でないことなど、仮定の合理性を評価した。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業的前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家と

しての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は有価証券報告書提出会社が別途保管しております。

2. XBRLデータは監査の対象に含まれていません。